夕飯が終り日課のビッショ掘る　沼田信一

鍬だこに砂ノミに泣き移民妻　故 斉藤信山

表紙説明

夕飯が終り日課のビッショ掘る　沼田信一

鍬だこに砂ノミに泣き移民妻　故斉藤信山

お産、育兄、炊事、洗濯、ボロツギ、子供や老人のビッショ掘り。尚その間に夫を助けて鍬を引いたのであるから、大方の移民妻は全くの功労者である。晩年その報いのある迄長命された人は幸いであるが、その途中でたおれた人も多い。その昔を知る人は手を合わせずには居れない。

前白ー挿画を措いて

牛窪　襄

「信ちゃんの昔話」　シリーズは、回を重ねる毎に人気沸騰であるから、八十才を過ぎた沼田さんには大変であろうが十部位は出してほしいと思う。前回の第五部は、ロンドリーナ市長の全く大々的な日本人開拓者表彰式　（式百五十余名）　に合わせて先駆者の百人録を軽妙に綴って楽しかった。当日表彰された人々に市長の手から渡されたのであるが、全く当を得た贈物であった。

今回の第六部は、ビッショと移民、と題しているが、移

民シリーズとしては欠かせないもの。移民の百人が百人経験した思い出である。唯かゆい経験ぐらいですんだ私たちには、今となっては懐かしい思い出であるが、バイキンに入られてひどい目にあった人も居るので、やはり嫌なものであった。それでも移民シリーズとしては欠かせないもの。

それが沼田君の筆になると笑いながら移民の赤裸々の姿が解るので、楽しくマンガを画いた。

一読御薦めする次第です。

沼田氏はパラナ日伯文化連合会相談役兼、同会経営モデル校教育委員長、ブラジル・モラロジー研究協会副理事長、ロンドリーナゴルフ場創設者、ロンドリーナ市在住。

第六部『ビッショと移民』の発刊を祝して

パラナ日伯文化連合会
名誉会長　福　島　正　登

私は自分では書きもしないのに、他人が折角書いた本を頂いても、仲々一気に終りまで読むという事がなく、五・六ページ読んでは又後でと、読みさしにして置く事が多いのであるが、沼田君の昔ばなしは、もう一つ、もう一編と

読んでいる内に、引づられて結局一晩で読み終わるのである。

それにしても、六・七拾年前の事を良く覚えて居られたものと思う。

美しい花を咲かすかと思わせた草を残して置いたら、大変な悪草で苦労した話だとか、田舎芝居でお軽身売りの金を持って帰る途中、いのししと問違えられて鉄砲に打たれるところを、小屋の裏で実弾を「ぶっぱなした」ので、びっくりして見物人が総立ちになった場面だとか。

ウルツー（毒蛇）の卵で卵焼を作って子供に食べさせると、子供がのぼせて眼がぎらぎらとして来たので驚いた話等々、移民でなければ味わえない話で珍しかった。第六部は、『ビッショと移民』という事ですが、これも又移民には欠かせない思い出で、面白い話が出てくる事でしょう。是非御一読をおすすめ致します。

沼田氏は私たちのパラナ日伯文化連合会並びパラナ運動連盟の会館並びに会館内に十教室を備えるモデル校の建設委員長としてこれを立派に完成させ、引続いて教育委員長としてモデル校の運営に当って居られます。

その忙しい中にあって次々と昔話を執筆されている事に感服している次第であります。

序

パラナ日伯文化連合会
会長　嶋田　巧

昨年は日本移民九十年と云う意義ある年に「信ちゃんの昔話」の第五部を発刊され、早くも第六部の刊行がなされるとの事で驚いて居ります。コロニアの過ぎ去った生活の苦しさを思い、現在の安定した暮しに感謝と喜びを実直に書き表している事に、読者の皆様も胸をうたれる事でありましょう。

現在（一九九九年五月）沼田氏は八十一才のご老体になられます。昨年は日本移民の九十年祭式典を最高の式典と喜び合う事を楽しみとして、全パラナ州の日系団体を訪問し、説明しながら、私も共に募金のお手伝いをさせていただきましたが、誠心誠意毎日の日々を募金運動に励んでおられる姿に只々、コロニアを愛している尊い後ろ姿だと感謝していた次第です。

先日クリチーバ市に用事で行きましたら、見ず知らずの人に、「信ちゃんの昔話」の続編が発刊されるのでしょうか心待ちに待っているのですが、と聞かれ我が事の様に、うれしく思った次第です。

沼田氏は特にパラナ日本語教育委員長の役職の身であり、とてもお忙しい事と存じますが、どうぞコロニアの愛読者の声援にお応え下さいまして、お体に充分注意され、続編の発刊をよろしくお願いいたします。

尚、氏はロンドリーナ市より数少ない名誉市民権を授与されている名士でもあります。

ー面白いー珍しいー　信ちゃんの昔話

ブラジル・モラロジー研究協会　理事長
モジ・ダス・クルーゼス市・イピランガ病院々長
森　昇

信ちゃんの昔話が、パラナの開拓当時の仲間の百人集を「赤土と移民」と題して発表、折からの移民九〇年祭を飾る。これが元でロンドリーナ市長、日本人の開拓者に感激、草創期の入植者二百数十名を招待して大々的に表彰し、逝去者には、謹んで丁重な祈りを捧げ、その盛大なる式典に末代に残る記念品に添えて沼田君の開拓者百人集が市長の手から贈られたという。

それが最後であったのか、八十才を越えられたのでと思っていると、移民の昔話を書きながら、あの苦労した、ビッショ掘りに付いて書いておかなくてはと、この頃第六部の発行をされる事になったという。

移民の裏話を赤裸々に書いてこの本程読者を引付けるものは少ない。一般諸氏にも御一読下さる様、おすすめする次第であり、私もこの出版を待っている者であります。

氏は私たちの会の登録以来の副理事長であり、ロンドリーナ・ゴルフクラーブの創立者でもあります。

はしがき

沼　田　信　一

移民はコーヒー園に入った人も、直接ジャングル開拓に入った人も、怖ろしい動物として行き会ったのは、幸いにライオンでも、熊でも、虎でもなく、うっかりしてふむか、さわるかしなければ噛みついて来ない毒蛇であったので、その被害は割合に少なかった。

その点南米は幸いであった。

然しその反面という事になるのか、おそらく日本では経験した事のないビッショに悩まされたのであった。尚、ジャングルが近くにある間は、雨模様になって、少しむし暑くでもなってくると蚊やその他の小虫の大群に悩まされるのであった。

赤ん坊をねがせるのに蚊帳を吊ってやっても、その目をくぐって入るので始末が悪かった。タバコを吸う者には、その煙を嫌うらしく大分楽との事であったが、吸えない者や子供達には大変であった。

然しそれも毎日の事でないので、やはり大変であったのはビッショ即ち砂のみのカユミであった。

夕飯が終わり　日課のビッショ掘る

ビッショ掘り　カンテラの灯で　髪を焼き

こうした思い出から、今回は『ビッショと移民』としました。前回同様に目を通して頂ければ幸いと存じます。

目　次

表紙説明
前白ー挿画を惜いて…牛窪襄
第六部『ビッショと移民』の発刊を祝して福島正登
序　嶋田巧
ー面白い・珍しいー　信ちゃんの昔話　森昇
はしがき　沼田信一

第一話　ビッショ（砂ノミ）と移民　10
第二話　ビッショ掘り…　13
第三話　ビッショ（砂ノミ）　18
第四話　竹の子ビッショと千匹ビッショ　21
第五話　いやな思い出　25
第六話…　面　積　28
第七話　移り変り　31
第八話　醤油の思いで（1）　35
第九話　醤油の思いで（2）　39
第十話　四十九才の結婚　42
第十一話　バーグレの手づかみ　45
第十二話　株売り　48
第十三話　木挽き　52
第十四話　身体障害者　55
第十五話　判コと署名　59

第十六話　除　名　62
第十七話　あるカザメント　65
第十八話　新妻の盲腸炎　69
第十九話　不動産　72
第二十話　ダイナマイト　75
第二十一話　二コントスの住宅　78
第二十二話　家たて　82
第二十三話　行　商　85
第二十四話　運・不運　89
第二十五話　道具の手入れ　91
第二十六話　人を馬鹿にするな　95
第二十七話　原木（トーラー）を売る　98
第二十八話　洋服の仕立て　101
第二十九話　籠編み　105
第三十話　『流転』　109
あとがき　113
著者略歴　114

第一話

ビッショ（砂ノミ）と移民

移民として不安の中にもコーヒー園に希望をかけて来て、いよいよファゼンダ（耕地）に配耕されてコーヒーの採集にでてみると、不作の年で日当にならず苦労されたという話は、初めのかさと丸移民の殆んどがそうであったらしく、又、その後も、ファゼンダの仕事が日当にならなかったという話はかなりに聞いたものであった。

然しファゼンダ（耕地）の仕事が日当にならなかった理由の一つには、移民の方にも、農業の経験のない者がインチキ手続きで行けばなんとかなろうと考えて来ていた人の中にもあったかも知れない。私の家もそうであった。又、当時のブラジルのいなかの労働者の賃銀は案外に安かったので大変であったが、後日使う立場になった時にはそれで助かったのでもあった。

然し来てすぐ食べるだけの賃銀が貰えないのでは大変で、少しでも条件の良い所へとムダンサ（引越）する事で切り抜ける事を考えて餓死する様な事のなかったのはきびしい冬のなかったおかげでもある。

さて食べる事は夜逃げも加えてムダンサ（引越）からムダンサで切り抜けられたが、ムダンサをしようが、少し楽になろうが、いじめられたのはビッショ（砂ノミ）であった。パラナでは一九五五年頃からか、カフェーにブ

ロッカ　（害虫）　の一種が繁殖したために、Ｂ・Ｈ・Ｃという農薬を散布することになってから少なくなったらしかったが、入植当初はお互いに苦労したものであった。

殆んど毎晩のように夕飯の後はビッショ掘りの時間であった。若い者は体がやわい上に目が達者なので、ビッショがどこに入ろうと掘り出すが、老人ではそうはいかない。子供のいない老人などはどんなに苦労したことかと思う。

先日私からこの話を書く為に話題を出したら、友人が語るに、或る日爺ちゃんの足を見たらビッショでいっぱいなので、数えながら掘っていたら四十数匹入っていたという人があり、又八十匹余り入っていたという人もいた。

全くかわいそうなのは老人であった。いくらか感もにぶっているのでそういう事になるのであったろうと、いう人がいるが、そうではない。目と体の自由が利かないので、そうなっていたのである。

それで毎日掘っていないと、生まれてくるのが出来て、爺ちゃんのタマンコ　（はきもの）　の中に白い卵がいっぱい有ったという話もある。

このビッショは入るとかゆいので困る。掘った後もなかなかゆみが止らない。ピンガ　（焼ちゅう）　やアルコールなどで消毒してもかゆみは止らないので困った。石油で消毒すると止るという人はいたが、我が家では、布団が臭くなるとて石油の利用はしなかった。

現在、ジャタイに近いコーロ・デ・ボーイ　（地名）　に

ファゼンダ　（耕地）　を持つ星野氏が私の近所にいたことがあって、その時、ビッショのかゆみはハッカ油に限ると教えてくれたが、これは全くの妙薬であった。又、このハッカ油は一口飲むと普通の腹痛も止める能力も有ったので、その後私の家では常備として欠かさない事にしていた。

その内にビッショは赤ん坊のつめの上からも入るという話が出てきたが、我が家に赤ん坊がいない時は信じられなかったが、私たちの子供が出来るようになったら、やはり爪の真中に入っていて驚いたのである。

幸いに最近では殆んどいないが、それでもファゼンダへ行くからか、たまには入る事があり懐かしいがいやな経験をさせられるのである。

ビッショはまだ絶滅はしていない。「ビッショと移民」。これは、昔の移民には懐かしいというには語弊があるが、忘れられない思い出の一つである事には間違いないのである。

それにしても、ろくに消毒もしない古い針で毎日掘ったのに、良くもバイ菌が這入らなかったものである。

いや、あんな不衛生な事をしていたのであるから、バイ菌に這入られて苦労した人も必ずいた筈である。幸いに私の周囲にいなかったということである。

此のビッショは豚の足やら犬の足にも入っていたものである。犬はよく自分の歯でかじり出していたものである。

又、コローノ　（小作）　の出ていった空き家とか、青年

会の会館など二、三ヶ月も空けて置くと、さあ大変。うっかり入るものなら、真黒になってこのビッショ即ち小さいノミが足元から上ってくるのであった。従って空き家を使いたい時はビッショを調べて、いる時は、十分に水をまくのであるが、出来ればクレオリーナ（石油乳剤）を混合してまくと早く退治が出来るのであった。

それに加えて、竹の子ビッショや、千匹ビッショにも見舞われていやな思いや、びっくりさせられたが、この方の事は二、三項後に説明しよう。

第二話
ビッショ掘り

始めに元コチア産業組合の従業員でパラナでは、私の知った時はアラポンガスの倉庫主任で、後ロンドリーナの主任になって恩給生活に入る間もなく気の毒にも亡くなられた山口実氏の奥さんが一九八九年の母の日に書かれた作文で、初期の移民の生活から、ビッショ掘りの一説もあるので参考に紹介させて頂きます。

”母を想う〃

私の母は明るい人で良く働きました。ブラジルに来た時は三十才そこそこのエネルギー一杯、父も三十代の働き盛り、大きな夢を抱いて母と四人の子供を連れて来たのですが、サントスに着いて船の中で親しくなった人達と別れて行く時は父も母も大変心細くなったそうです。

言葉もわからず食べ物は、野菜もなく今まで食べたこともない、フェジョン（豆料理）や、カルネセッカ（干した牛肉）、リングィサ（腸詰）等で、子供達に食べさせるのに一苦労だったそうです。

家はパルミット（椰子）の木で造った粗末なあばら屋でした。朝早くと、夕暮になると、モスキット（蚊その他の虫）に顔や手足をかまれ子供達は可愛想でした。それでも早く成功して日本に帰りたい一心で泣き泣きエンシャーダ（鍬）を引いたそうです。その時、私達は、まだ小さかったので母の苦労も知らず、よく泣いては母を困らせたらしいのです。

四、五年たって父は、ファゼンダ・コアッチー（コアッ

チー耕地)、今のシャングリラー市街地で働くことになりました。

そこは日本人ばかり十家族余り住んでいたので大変心強く皆助け合って一生懸命働いたそうです。其の内に母に子供が出来ました。生まれたのは男の子でしたから父は大喜びでした。ロンドリーナの日系ではその弟が初めての二世となった様です。天野幸雄となづけられ元気に育ちました。ミーリョ（トウモロコシ）が沢山取れたので母はうすでついてカンジッカ（皮をむいたもの）を良く煮て砂糖で味をつけて食べさせてくれました。今でもあの味と母の姿が目に浮かんで涙がこぼれます。

夜は、子供達が眠ってから足のビッショ（砂ノミ）を取ってくれました。朝起きてくると、母は笑いながら「夕べは、お前達のビッショを掘って居る内に、ランパリーナ（カンテラ）の火で母ちゃんの頭の毛をチリチリと焼いたよ。」

と、言って、それを見せ皆んなで笑いましたが、その母の顔は泣き笑いでした。

若い時、一生懸命働いたお陰で暮しも大分楽になりました。其の内母も年を取り体も少し弱りましたが、若い時からの母の苦労を知っている子供達は、母を大事にして孝養を尽くしました。眼も体も不自由になった母のビッショを掘ってあげると、ビッショ掘りをして育てたお前たちに今は掘ってもらうようになったと喜んでいたその母も、晩年

の幸福を感謝しつつ神に召されて行きました。
今日の母の日に寄せて感謝の念で一杯です。お母様有難う御座いました。

一九八九年五月「母の日」に

山口　富枝

以上は山口夫人の綴り方であるが、仲々簡単な文の中に初期移民の模様が良く書かれていると思う。
配耕される時の心配、耕地での食べ物の苦労。激しかった、モスキット（蚊その他の虫）の襲撃、帰りたい一心で泣き泣きエンシャーダ（鍬）を引いた、ミーリョの皮をむいてカンジツカにして子供に食べさせたあたりは此の人北海道の開拓の経験があるみたいだ。苦しい中にもロンドリーナに来て、ホッとした所へ弟が生まれて親子で喜んだ辺り眼に見える様な気がする。
次にビッショ掘りの件が書かれている。夜は食事の後片付けの後で必ず着物のツギ当ての仕事が有った筈であるが、それを済ませてから、子供たちの足の指の周囲に喰い込んでいるビッショ掘りをしてくれたと書いているが、我々には全く良く理解出来る状景である。その時にカンテラの火で髪の毛を焼いたというが、我々昔の移民では、その経験をしていない者はない位の筈である。
知らない者は、ナゼそんな近くにカンテラを持っていくのか、というかも知れないが、カンテラの灯りとは暗いもので、若い者でも皆、髪の毛を焼いた覚えはある筈であ

る。勿論私も何回か焼いたものである。
パラナに於ける農村の電化などは一九六〇年代の半ば頃からではないか、と思う。電化されて明るくはなっても、ビッショには喰い込まれたのである。あのかゆい、かゆいビッショの味わいは、どうしても移民の昔話からは、外されない大きな話題である。砂ノミは小さいけれども随分と長い間付き合った仲間である。
先日友だちが手の指にビッショを入れて、
「もう此の奴何日になるんだ」と言って見せていた。
「どうして掘らないのか」と、きくと、
「懐かしいから何日で卵が生まれるのか数えているのだ」
という事であった。昔苦労させられた仲間が久し振りに入ったので懐かしがっているのであった。
私にはその気持ちが理解出来るのである。
又それ程ビッショとは縁が薄くなったという事でもある。私たちカフェー栽培者にはブロッカーというカフェーの実に入る害虫が発生してＢＨＣという農薬を撒布する様になってから砂ノミは姿を消して行った様であるから、消毒の激しかった綿作地帯では更に早く砂ノミとの縁は切れていたかも知れない。

第三話

ビッショ（砂ノミ）

普通のノミ（蚤）といっても現今では殆んど見られなくなったが、それでも犬や猫を飼う家ではノミは見られるであろう。今日育つ子供たちではノミやシラミは知らないのかも知れない。

その普通のノミの三分の一位の小さい砂ノミであるが、妊娠をすると、動物の皮膚の中に喰い込んで血を吸いながら腹の卵を育てるのである。三週間かそこらで産卵期になるのであろうが、その頃にはあの小さなノミが実に大豆粒程の大きさになる。元のノミの何十倍の大きさであるが、果して此のノミ産卵後元の体に戻れるものであろうか。実験した事がないので解らないが、とても戻れないであろうから、そうとすれば一生一度の産卵である。

一度の産卵で一生を終るとすれば誠に哀れな生涯である。小動物には、そうした種類の物が案外に沢山有る様であるが、その事に付いては項を改める事にして話を進めたい。

ビッショという語源からすれば虫の総称で砂ノミに限るものではないが、一般にビッショといえば砂ノミという事になっていた。

然し又、砂ノミという訳もどこから出てきたのか分からない。砂粒の様に小さいという事かと思うが、日本語に訳

した時はそう書いてあるが、日本の人には分からない言葉ではないかと思う。足のゆびを主にかかとの方迄、全般に食い込んでくるいやなノミであった。

暗いカンテラの灯りでこのビッショを掘り出すのであるが、気を付けてころっとキズつけずに掘り取るのは仲々面倒なので、針の先をちょっとカンテラの火で焼いて消毒してからビッショの腹を破って卵を絞り出して置くのであるが、死んだビッショが残っていても、又、きれいに掘り出しても、その後のかゆみはなかなか止らない。アルコール更に良くピンガ（焼酎）で消毒したものであるが、ピンガでもアルコールでもかゆみは容易に止まらないのであるが、その内に疲れで眠るという事であった。

子供や視力のうすい老人では、若い者が掘ってやらなければ大変だったのである。

そうしたビッショとの付き合いがカフェー地帯では、一九六〇年代までは続いていたのであるから、相当に長いものであった。

クレオリーナ（石油乳剤）という消毒薬が有ったのであるから、時々消毒しておけば相当には防げたはずであるが、布とんの中が臭くなるから出来なかったのであろう。

それにしても豚や犬の足は消毒してやれば良かったのに、それもしたという人は少ない。

このビッショ、犬には入っていたが猫の足に入っているのには気が付かなかった。体には普通のノミをわかしてい

たが、砂ノミを足に入れているのを見た事が無かったのは、猫はそれだけ敏感であったのか、それとも此方がそれに気が付かなかっただけの事で同じ様に入られていたのかも知れない。

豚の足などにも気持ちの悪い程入っている事もあったのに、現在では殆んど絶滅した状態なのは有難い。

ほんの此の頃の事であるが、近所のお婆ちゃんに聞くと、家族の居ない年よりは不自由したらしく、その人の近所に子無しの老人夫婦が労働者として働いていた時、その老人の足を見ると足の形が変る程ビッショに入られていたので、かわいそうに思って、良く洗ってから掘り出してやろうと洗って見ると、何百匹入っているのか、重なり合って入っているので、縫い物の針ではとても間に合わないので、サッコ（麻袋）を縫うバルバンテ針（一二・三センチ位の太い針）の先を研いで、ブス、ブスと、産まれそうになっているのを先に破って消毒してあげて何日もかけて掘り尽くしてあげたそうであるが、そこから移転された後、しばらくするとビッショを掘った後にバイキンが入って亡くなったという事であった。

全く子供のいない老人にはビッショは大変な厄介ものであった。

この頃、Hさんという人と知り合う事になって、或る日ビッショの話が出たが、此の人の若い時の話である。やはり掘った後にバイキンが入って膿をもち大変ひどい目に

合ったという事である。
若い者が夜だけ掘る事にしていれば、カンテラの火で針の先を焼いて消毒するから良いが、畠で昼休みなどの時に気がつくと、ランショ（山小屋）の壁のヤシのシンだとか、木の枝に出ているトゲだとかを使うから、そんな時にバイキンの入る機会はあるはずで、考えてみればひどい目に合う事の少なかった人は幸いであったのである。

（註）この本を仕上げしようと思って友人たちに改めて聞いて見ると、ビッショを掘った後に　破傷風らしいバイキンが入って命を落した人も相当にいる事を知った。
ロンドリーナの草分けの荒長十郎氏も男の子を一人亡くしていたという事である。
あの非衛生な状態の暮しの中では当然な事であったが、その家族の身になれば耐え難い　愛別離苦の苦しみで、ブラジルに移住した為に遭遇した災難であった。

第四話
竹の子ビッショと千匹ビッショ

これは前文のビッショ、いわゆる砂ノミとは違って、ハエの産んだ卵がウジになって動物の皮下に入るのであるが、たまたま人間様にも食い込むので性が悪い。
人間に喰い込む経路は、後で判ったのであるが、乾して

ある洗濯物に産みつけられた卵が孵化して、人体に入るのが多いらしい。それは外人達が、洗濯物にきちょうめんにアイロンをかける姿から気がついたのである。日本人は男も女も畠の仕事に熱中していて仕事着などにアイロンなどかけていられなかった。又、そんな虫がいる事も知らなかったのでしかたがない。その為に時々此の竹の子ビッショに喰い込まれたのである。

何故に竹の子ビッショと命名したのかは知らないが、この名は日本人の付けたものと思う。

大きくなってから絞り出すと、体半分は出るが頭部はなかなか出にくい。力一杯圧えると『プッーン』と飛び出してくるが、そうして飛び出た虫を見ると、下半身は白い唯のウジで頭部は大きく堅く渦巻状に黒い毛が生えていて、ちょうど竹の子の本の方の節の廻りにボッボッとしたものがあるのに似ているので此の名が付いたものと思われる。

私も二度三度喰い込まれて自分で絞り出したが、背中に入った時はどうしても他人に絞り出してもらわなければならなかった。小さい穴から入り、中で太っているので出にくいのである。

新移民の時は知らないので力で絞り出すばかりであったが、後にはタバコのヤニで穴をふさいでおくと短時間で死ぬので、その後に圧えると簡単に出ると言う事を聞いたが、きいてから入られた事はなかった様である。

此のビッショ、時々異な所へ入って苦労する事があった。

始めの内は一寸かゆい、こんな所へ出来物が出来たか、その内に治るだろうと思っていると、時々チクチクと痛みだす。吹き出物かと思っているが、カサブタも張らず、何んだろう、何んだろうと思っている内に痛みが強くなる。圧えてみても一寸汁が出る位で、チクッ、チクッと痛みは増してくる。

虫が大きくなって噛み付くのであるから相当の痛みで仕方なく、旧移民に聞いて見ると『それは竹の子ビッショだろう』と、言う事になるのであるが、その旧移民が、タバコのニコチンを張る事を知っていてくれると良いが、絞り出す事より知らないと大変である。笑い話ではすまされない。

私の植民地で一人の娘さんに入って、近所の旧移民が、絞り出したとの事であった。その話を聞いた頃は、嫌なビッショが居るものかなと思ったが、その頃はまだ洗濯物にアイロンをという事には気が付かなかった。

実際に私の腕に入った時、片方の手の親指と、人さし指で挟むのであるが、ウジの下半分は出てきても頭の部分が仲々出て来ない。此方が疲れてつまみなおそうと思ってゆるめるとすぐ又、中にもぐってしまう。

きょうだい喧嘩なら一寸つねった位で泣きさわぐのに、力一杯圧えて、尚疲れてつまみなおしをしてやっと取り出すのであるから、我慢をする方も大変である。

それ程圧えるので取り出すというようなものではなく、此の虫、プツーンと音を立てて一メートルも、までも飛ん

でいくのである。
それ程圧えるので後で肉がいたむかと心配するが、大抵化膿する事もなく治ったものである。
噛じられるのも痛い、絞り出すにも痛い目に合わされたのであるが、此のビッショは、砂ノミに比べて数の少なかったのは幸いであった。
次に千匹ビッショであるが、「ビッショと移民」と題した此の本では、主に足の指の周囲に人った砂ノミとの付き合い？　を書きたかったので、他のビッショの事は、書く事によって、実際には少なかった事柄でブラジルのイメージをキズ付ける事になっては悪いので、千匹ビッショの事は、そういう虫もいたという事で終らせて頂く事にしたい。
このウジは、過ぎた戦争中負傷兵の手当てが間に合わない時、そのキズの所にウジが湧いたという話であるが、そのウジの事であるから、此方は平時の事でその事を知るまでに一度驚かされるだけで度々ひどい目に会うというものではなかった。

第五話
いやな想い出

ブラジルに着くと十日とたたぬうちに原始林の開拓が始まったのであったが、自分の土地を拓くのであったから、一生けんめいと言っても監督が付いているわけではなく、出来るだけの仕事であるから、仕事はきつくても楽しいものであった。

一日、木を倒せば、それだけ自分の畠が出来るので大変張り合いがあった。一ケ月程すると請負わせた分と合わせ

て五町歩（約二アルケール）が倒され、一週間程良く焼ける様にと枝打ちをして廻った。
少し小高い処から見ると、相当に広い畠に見えたのは、日本から来たばかりであったからであろう。更に自分の土地が八アルケールも残っているので希望は燃え上がってくるのであった。
希望は、希望で良いのであるが、そこには又、色々と辛抱しなければならない事もあった。
私と隣りの土地は道縁りから奥に向かって三分の一位が平坦な半ブレージョン（湿地）地帯であったが、便利上道縁りから開拓を始めた。従って井戸は浅くして豊富な水があって便利であったが、モスキット（小虫）と蚊が多いので、閉口した。しかし、閉口しても負けてはいられないので、男も女もズボンをはいたが、ズボンと靴下の間からもぐり込んで来るので、食事の時など、エストッパのサッコ（粗末な空き袋）の中に両足を入れていなければならない様な日が続く事もあった。タバコを吸う人は少し助かるらしかったが、吸えない者にはどうしようもないのであった。
あんなに蚊や小虫がいたのに夜はどうしてねたのか忘れてしまったが、蚊帳はなし、蚊取り線香もないので、頭には何かを、かぶってねたのであろう。
然し驚いたのは、そのモスキット（小虫）等と共に、べんとうに集まるハエであった。大きなレンソ（フロ敷）らしい物に包んで行ったのでは、結び目の間からモグリ込む

ハエがいて中に卵を生みつけるので、穴のあいていない空き袋に入れて、口をバルバンテ（ヒモ）でしっかりと結んでおくのである。そうして置くと、卵は産み付けられても中には入っていないので安心であった。

それでも考えてみればきたない嫌な話である。結び目の辺や、中の汁が洩れたりしていると、そこへハエが白や黄色の卵を相当に産み付けている。幸いにウジになる時間が無いので、空き袋に入れておけばまだ安心であった。

パラナに来てからもデルーバ・マット（森林の伐採）の間は同じであった。

パラナでは、カフェーの植えられる乾燥地帯であったが、土地が肥えていたので大木が良く繁茂していて、地面には常にしめりが有った為であろう、ハエやモスキット（小虫）が沢山にいたものである。

今日の若者であったらとても我慢の出来る様なものではない。

小さな虫が顔面にたかって来てやり切れず、手で追い払ってもすぐ又寄って来る。まばたきすると、まぶたで二、三匹の小虫をはさむのであるから、とても、普通では想像出来ない状態であった。

然し当時の移民は、良い土地に独立が出来る、植え付けるコーヒーもサンパウロ州の三倍も四倍もの収穫を生産してくれる見本が、そこ、ここに有るので、希望一杯で、あの大密林をモトセーラ（チェンソー）もなければ、唯マ

サカリ一丁で開拓したのであるから、希望が持てたという事は全くおそろしい力であった。
べんとうの袋には白や黄色のハエの卵をビックリする程産みつけられていて、今ならちょっと食べかねる様な食事に何んの不足も言わずにやった仕事である。
開拓者のこんな話も我々には懐かしい思い出であるが、懐かしいと一杯飲みながら話あえる人の少なくなった事は誠に淋しいものだ。

第六話
面積

当ブラジルでは面積の単位にアルケールを使う。一アルケールは二万四千二百平方メートルという事になっている。どうしてそんな半端の計算になっているかというと、昔はそんな半端ではなく、五〇尋に百尋の四角で五〇〇〇平方尋という事であった。
尋とはブラジルでは二メートル二〇センチの事をいい、それは男が両手を拡げた時の標準を取ったもので一ブラッソという。
そしてそれは、男が手を開いた時の親指の先から小指の先までのいわゆる一パルマの十倍という事であるから、二

パルマは二十二センチが標準とされていた様である。私の手ではやっと二十センチにしかならないが、ブラジル人の一般では二十二センチは無理のないものである。

土地の面積でもミーナス州になると、一アルケール・ミネーロと言って倍の広さが有るというのは、百尋×百尋であるから恰度倍有るわけであって、一万平方尋でなにも端下はなかったのであるが、後にメートル法にして計算したので、四万八千四百平方メートルと端下がついてくる事になった。

そこで政府は計算のしやすい様にメートル法に徹底して次第にアルケールをなくして、百メートル四角の一万メートル平方を世界的に認めている一ヘクタールという単位に統一しようと努力しているのであるが、国民の方は仲々、アルケール単位から抜け切れず、私の土地は何アルケール有りますとは何時も記憶しているが、ヘクタールで覚えている人は殆んどいない状態である。連邦政府から送られてくる地租の通知では両方の単位で表わされている。これが一方に固まる迄にはまだ相当な期間がかかる事であろう。

先日日本から見えた知人が、私達の団体で所有している土地が、どの位の面積があるかと聞かれるので四十アルケールですから大体九十七町歩程になりますというと、坪にして何万坪位になりますかと聞きなおしてきたので、一寸計算器を借りて四十アルケールとは大体二十九万坪を少し超過する事になりますと、答えると、それでは約三十万

坪ですか、広い物ですなあ、大体東京の宮城の面積です、といわれたので私は一寸奇異な気持ちがした。

日本には約百メートル角を一町歩とし、その十分の一を一反という面積の単位が昔から使われているのであるから、大きな面積になれば何町何反と言う方がピンときそうなものであるが、此の人都会の人であるから普段の考える事が宅地などの事で何坪何坪などと、話し合っているのが習慣になっているのであろう。

日本の農業雑誌等を見ていると、アール（十メートル四方）或はヘクタール（アールの百倍）が随分使用されている様であるが、これも実際に農村に入って見ると、何町何反と言う習慣が残っているのではないかと思うのである。

今の主人方は皆んな学校ではメートル法で勉強してきているのにそういうものである。それに付いてなる程と思わせられた事がある。

サンタ・カタリーナ州に招聘されて来てりんご栽培を成功させた後沢博士がパラナに来られてボールド液の作り方を指導下さった時の事である。

年齢は私たちより少し上位の人であったから、学校ではメートル法で勉強した筈であるが、卒業後、農村での指導が、水は何斗何升に、石灰や硫黄は、何百匁と指導して歩いていたらしく、リットルとか、グラムではぴんと来ないと言われて、結局何斗何升で説明され、こちらの技師が計

算器で計算してはリットルやグラムを出していたのであった。

古い話ではないので考えて見るとこっけいな話の様であるが、長い間の習慣というものは政府が変えようと決定しても百年はかかると思われる程難しいものである。

ちょうどいまだにレアールの勘定にクルゼーロといってみたり、二コントだ三コントだと数十年も前の単位が出てくるのと同じ事だ。

（註）尋は日系の場合、水深などはかる時に使われる事もあるらしいが、その長さは六尺というので約一メートル八〇である。人種に依って尋は尋でも標準は違っていたのである。

第七話

移り変り

パラナに移って間もない一九三八年に弁論大全に入賞して、全伯大全に出場すべく出聖した。

当時はサンパウロへ出る事はもっとも大きな楽しみであった。親戚や友達から、何かと買物など頼まれて意気揚々と出かけたものであった。

当時一九四〇年以前のサンパウロは、ジョン・メンデス

が中心の様で、その周辺僅かが舗装されていたが、少しはずれると土道であった。

ガルボン・ブエーノなど全然日本人街の様な姿の始まりらしい物も無かったと思う。ジョン・メンデスの脇のコンデ・ド・ピニャールに中矢商店かと思うが良い店があって、二・三度入って見た。蜂谷商店にも入った。城島商店は金物店であったか。運動具はどこの店で扱っていたのか、野球部からボーラ（ボール）を頼まれていて一打買ったら大きくデスコント（割引）してくれて帰ってから喜ばれた。

僅かの小遣いしか持っていないので何程の物も買えないのであるけれども多くの店を廻って楽しんだのであった。一行は今マリンガに健在の平田務君（当時中央区）と、ローランジヤのカフェザール植民地に住んでいた手島丈夫君（此の人は故人となった）と、それに、どこかの学校の若い先生が同道してくれていたが、誰か忘れてしまった。

此の四人で歩いていてアルモッサ（昼食）に小さなレストランに入ったらコメルシアール（一般定食）の様な食事であったが、フェジョン（豆）に、トッシンニョ（豚油）が、短冊形に切られて沢山入っていてフェジョアーダのつもりであったかも知れないが、豆は黒豆ではなかった。このトッシンニョがおいしかったので家に帰ったら作ってもらおうと思いながら食べた事をいつまでたっても忘れないのである。

大切なことは良く忘れるのに、こんなつまらない事を何

時迄たっても忘れない自分を、如何にもおめでたい出来と思っている。

さて、私たちは弁論大会に出て行ったのであるから、長居は出来ないのであるが、その時全伯青年野球大会も開かれていて、ノロエステ軍の弓場勇君がピッチャーでがんばっていた。元気良くスピードのある投球に観衆が、固唾を飲んで見ていた光景を思い出す。又、反面のんびりしていたというか、見物の中にボール紙を持って歩いて、「さあ次の試合は何点対何点でどちらが勝つか」と賭け事を誘って歩いている人がいた。勿論日本人であった。この賭け事は絶対的に胴元が勝つ割が強いので当てた場合の返り率も良かったのか、賭ける人も案外にいた様であった。何点対何点での勝負になるかと言うのだから当たる筈がないと言いたい賭け事だと思うけれども興味を持つ人がいるから、世話をする人も出来たのであろう。今では見られない昔の一風景である。

此の話大変横道にそれてしまって申し訳ない。私はこの横道に入った話を別の項として書く程の事もないので書いた次第、あしからず。

さて弁論大会に出聖した折、珍しいので新聞紙上で知っていた店を数店ひやかしの様に廻って僅かばかりの物を買って帰ったのであった。その時の店が懐かしく次に出た時も同じ様に廻って歩いたものであるが、それから五十年

六十年経た今日では当時の大商店は殆んど姿をけしていて淋しい思いをしているのは私だけでは無いと思うのである。ニテロイのホテルが閉めただけでもどれだけの人が淋しい思いをした事であろうか。同じ商売を親子孫と二代三代続けるだけでも仲々難しいものの様であるが、激しい移り変りの世の中で、京都や奈良などには二百年も三百年も続いている老舗が相当あると聞くのであるが、羨ましい事である。

此の頃の一般では自分の一代さえも安定しない家が多い現状であるが、移民も百年近くなり遅い人でも三十年四十年となってきた現在、激しい変遷の生活から、もう少し落ち着いた生活に入りたいものと考える此の頃である。

コチアも南伯も、まさかと思っていた南米銀行迄がむずかしくなってきた今日、日系の中型企業で百年の記録を立てられる線上に在る人は、益々の成功より確実な守成を考えてもらいたいものである。懐かしい店が閉められると淋しいものだ。

第八話　醤油の想い出

それはまだブラジルに来て間もない頃の事であった。

私達は植民地に相当の植民者が入植している所へ来たのだが、売店には味噌や醤油は置いてなかった様である。味噌は各自が作るし、醤油を作れる人が居なかったのであろう。

味噌は大豆さえあれば、各自が家庭で作る事が出来たが、醤油の方は簡単にいかなかったらしい。

それで二・三度ウソの様な事に出会ったことがある。

それは、私と父とで十数キロあるキロンボの町へ買物に出た帰りの事であった。
五・六キロ戻って来た頃、道べりで働いていた人に、父が一寸挨拶すると、その人が新移民の私らに愛想良く、「一寸家迄よって行って下さい」と、無理矢理に案内してくれた。
住宅は何年かかるか分からないと言いながら建築中であったが、既にその家の中に暮らして　話では農閑期に、自分で板を引きながらボツボツと立てているとの事で、大変な大仕事だと考えながら黙って父たちの話を聞いていると、間も無く醤油の話になり、『味見をしてみて下さい』ということになり、最近作ったという醤油を奥さんに持ってくるように言いつけた。
夫人は恥ずかしそうに
『あなた、あれは醤油というようなものではありませんよ』
と言う。主人は
『いいから持って来い』と言う。
二、三度の問答の末、恥ずかしそうにして、小皿に持って来た醤油は、何か少し黒すぎるようだが醤油らしい色で、ブラジルに来てから初めて見る懐かしいものだった。
父は
『いやあ、珍しい、どうしてこんな色が付きましたか』
などと言いながら指先につけて味を見ると、塩気に少し甘味の有るのは良いが、大変に焦げ臭いのであった。
とても醤油といえる物ではない。父はさすがに町で苦労

してきているだけに上手な愛想を言って作った方法を聞くと、黄色い砂糖を黒く焦がして、塩水と合わせたとの事であった。塩水よりは良いとも言いかねる様な代物であった。

もう一度醤油では驚いた事がある。

私達が入植した所から五、六キロ手前に私達より少し早く入植した松岡さんという、大家族が住んでおられた。この時も父といっしょに、その少し手前に豊田さんの店が有って、何か買い物に出たのであったが、ついでにちょっと松岡さんに会って来ようといって訪ねた。

その日は日曜であったのか、大勢の人が集まって賑やかに雑談をして居られた。

主人の松岡氏は少し肥えた大きな人で温厚そうな方であった。

招じられて中に入ったがサーラには若い青年たちが大勢で賑わっていたからか、此方へと誘われて、戸も無い隣りの間へ入ると、そこは広い台所であった。大きなテーブルがあったのは大家族の食堂でもあったのであろう。

ここでテーブルに坐る間も無い内に主人の松岡氏が、『此の頃醤油を漬け込んだ。ちょっと味を見てほしい』

と言われた。お互いによほど醤油に不自由していたのであろう。するとそこへ出て来た夫人が

『あなたが味見と言っても漬け込んで、まだ十日位でどうしようもありませんよ』と言って恥ずかしがる。

それでも珍しい事に、台所の角にきれいな百リットル入れの樽が置いてあった。
醤油はこの樽に漬け込んであった。
松岡氏がふたを取ると、中は白い豆にミーリョ（トウモロコシ）、それに米のコウジを混ぜて仕込んであるが、驚いた事に、『醤油の味見をしてくれ』と何回もいうのに、少しも色の出ていない、ただの塩水なのであった。
それもその筈、仕込んで十日と言うのであるから当然だろう。
ここでも父はやはり世渡りの経験者であった。一サジ汁を手の平に取って味を見て、
『味噌と違って醤油の味が出て来ている』
と言ったのである。
帰り道に、父が言うには、ミーリョが入っていたのは意外であったが、大豆もミーリョも炒ってあるので、日がたてば醤油らしいものにはなる筈だ、それにしても日本で二、三軒隣りに味噌や醤油を作っている店があったのに少し習ってくればよかった、と後悔していた。
醤油とはもう一度面白い出合いがあった。その人は砂糖工場から出る糖蜜（メラード）を塩水でのばしたというのであったが、まねしてでも作ってみようかと思えるものではなかった。
日本人に醤油のない生活は耐えがたいものの様で、初期の移民は以上の様な、コッケイとも思える様な苦労をしていたものであった。

それでは我が家の醤油はという事になるが、それは少し長くなるので項を改めたい。

第九話
続　醤油の思い出

前編で三度の醤油との出合いを書いたが、それでは私の家では、どうしていたかというと、父が僅かに五ケ年の在伯で亡くなったのでしたが、その間に醤油を仕込むという事はなかった。

父がその昔、親について北海道へ移住した頃の人達は、殆んどの人が、味噌を仕込む時に、わかしざましのお湯を加えて、かなりに柔い味噌を造っていた様である。

その柔らかい味噌が出来上がると、その中にミソコシの細長いザルをさしこんで置いて、そこへ溜まる汁を取って醤油代わりに使っていたようである。それでこちらに来てもそうしていた。

色はうすいし、多分に味噌の味であるが、それで間に合わせていた。色付けに砂糖をカルメラ状にして混ぜていたかも知れない。

再三、味噌の溜りを取ると味噌の味が落ちるかも知れないと言って、後では味噌を取り出して水と塩を足して沸か

して後、これをこしてそれに砂糖をカルメラ状にしたもので色と甘味をつけたらしい。
そうした物を常時使用していると、醤油が市販されるようになってから、わざわざ買って来ても、『味噌醤油の方がうまい』と言って本物に急にはなじまなくなっていた。

後日談になるが、四二年度の大霜の翌年は西瓜の当り年で、自然生えのつるにも立派な西瓜がゴロゴロと実り、更に不思議な事には、毎年入って困るうじが、無消毒で全然入らないのであった。
そこで思い立って、西瓜糖を一斗（２０リットル）かんに三つ、四つ作ったのである。
これは、ただのボリンニョ（麦粉に少々の砂糖を混ぜてねって油で揚げた物）や、パンに付けて食べてもおいしかった。
腎臓の薬にするという人にあげた事もある。
とにかく沢山あったので、妻が醤油の色付けに使ってみてはどうかと試してみると、大変にうまいものが出来て、なんと十ケ年も西瓜糖醤油を賞味したのであった。

その西瓜糖醤油がなくなる頃、私は町に暮らす事となり、市販の物を利用する事になるのだが、子供までが町の物はまずいというので困った。
それでなるべくうまい物を食べさせたいと思って、サンパウロ産の高級品を買ってみるのであるがうまくないと言

われ、仕方なく味噌からの醤油を何回か作った。
その内にロンドリーナで醸造していた『曙』印がうまいという事になり、石谷さんが製造を中止される迄曙ファンであった。 今クリチーバ市で弁護士として活躍している石谷君のお父さんの製造だったのである。
その後サクラ醤油に長くお世話になっている。

此の頃キッコーマンが良い、うまい筈だと思い、折りから日本からのお客を接待する機会が多くなって来たので買って見るのであるが、なかなかサクラから離れられないのは、唯安いからと言うだけでなく、長く舌が慣れているからだと思う。
新しく食品市場に入ろうと志す人は、品質や値段のほかに、人の嗜好を変えさせなければならない前提条件があると考えなければ成功は難しいと思う。

話が一寸横道にそれました。
私は西瓜糖醤油の処で一寸書き足して置きたい事がある。
幼少年時代、胃腸が弱くて助からないと、多くの医師から診断されていた私が八十才を超えても案外元気で暮らしていられるのは、十年間の西瓜糖の常用が影響しているのではないかと思う事があるが、どうだろうか。
私の西瓜糖は、西瓜の赤いところをペネーラ（ふるい）の上で絞って、その汁だけを煮つめたもので、添加物は

皆無、勿論砂糖も入れなかった。全く純粋の西瓜ジュレーヤ（ジャム）で、甘いおいしいものでした。十年愛用しましたが、冷蔵庫にも入れずに置いて少しもいたむ事はなかった。更に入れ物のブリキかんにはサビがこなかった。今考えても不思議な気がするのである。

第十話　四十九歳の結婚

いつか農作物も時期はずれに植えて成功を考えるのは無理という事を書いたが、人間の結婚という事も適齢期にしておく方が良い様であるが、此の適齢期も昔に比べて数年或いは十年近く遅くなって来た様であるが、それは一般の寿命が延びた為かも知れない。

それで考えるのであるが、実際にはその人自身の持っている運命に依って決まるもので『結婚は適齢期にさせておかないと……』と、言う事は一般論でしかないので、適齢期の結婚でも家庭的に不幸な人は幾らでもいるのである。

然し子供の欲しい男性の晩婚は相手に可能性がないと困る。

ここで私は四十九才で面白い？ 結婚をしたS氏の事を紹介しておきたい。

S氏は既婚者で五〇才近くなっていた。町に立派な住宅を持って生活し、畠に通っていた。

一九四〇年頃畠に日本人の歩合作者を入れた。未亡人になっている母親と独身の青年が二人の三人家族であった。暫くして畠に行って見ると、小さな子供が数人いて大変賑やかなので、どうしたのかと聞くと、母親の言うのに「娘が良人に逃げられたので、六人の子供を連れて戻って来た」と、言う事であった。

三十前の娘という女は小柄ではあったが健康そのもので良く働くし、六人の子供たちも上の子は弁当運び位には間にあい、その内にエンシャーダも引くようになろうと、S

氏は、最近買い取った私の近所のシッチオ　（小農地）　を此の大家族に任せたのであった。

十アルケール　（二十四町歩余）の畠はいつもきれいに手廻し良く作られるのでS氏は安心していたが、子無しのS氏は、六人の子供を持ちながら、ピチピチと若い娘の様に走り廻る様にして働いてくれるこの婦人に魅力を感じ出し一緒になったのである。その翌年一九四三年に男の子が産まれた。

なぜ詳しく知っているかと言うと四三年には私の長男が同じ頃産まれていたからである。私は二十五才であった。S氏は五〇才であった。

私は此のおじさん五〇才で子供を産んでどうするのだろうと他人の事ながら心配していた。

ところがどれだけうれしかったのか、親戚知人を招待して盛大なお産祝いの宴が催されて私も招待されたのであるが、行って見て、又驚いた事は本妻が来ていて、赤ん坊を抱いてあやしているのであった。

又、このいわば二号夫人は土曜になると二キロ歩いて六キロをバスで町の本妻の居る本宅に来て、掃除洗濯食事を作って本妻のお世話をしているのであった。普通なら遊んで暮らす二号さんが、全く本妻の女中さんの様な働きをしているのである。六人の子供を助けてくれた主人への奉公でもあったろうが、気性の明るい、元気な人であった。

だがS氏には、長男に続いて又産まれ、又産まれ、立て

続けに六人産んだのである。
　このおじさん五十才から六人も産んで、六人の連れ子と計十二人である。将来をどう考えているのだろうなどと他人の事ながら少し気になったものであったが、それは全くことわざ通り「他人の疝気病み」であった。
　問題はその人の持つ運の分量で、良い運を持っておれば万事ＯＫだし、反対ならば、いつ子供を授かっても幸せにはいかないのである。
　Ｓ氏の場合、本妻とも八十才半ば迄壮健で暮らしたので、勉強の好きな子は大学も出るし、畠仕事の好きな者は畠を拡張して行くし、それぞれ一人前に成長した姿を見、更に何人もの孫の顔を見る事も出来たのであるから全く万々歳であった。

第十一話
バーグレ（ナマズ）の手づかみ

　家から数百メートルの処を流れるリモエーロ川のペスカ（魚とり）では、二匹の鯉のとれた事があったが、その後二度と鯉はとれなかったが、小魚がとれたので休みの日には時々出かけていた。
　その内に気がついたのは、釣りはひまがかかるので、ど

こかで見た竹で編んだ胴をかけて置けば一日に一回一寸行って揚げてくれば良いので簡単と胴の製作に取りかかった。

竹は隣のファゼンダになん株か有って幾らでもただで貰えた。

然し、一度見た位の事では容易に出来ないものだ。特に魚の入り口を次第に細くしようと思うとうまくいかない。籠を作る時でも、次第に口の方を広げようと思う時はかんたんで、少し細めようとすると仲々難しいものだ。それでどうにもならないので終わりを針金で下手くそな、人に見られると恥ずかしい仕上げになったが、他人に見せる物ではないからと、なんとか仕上げて、早速川のへりの横に掘れ込んでいる処へ突っ込んで流れて行かないように木の根に細いヒモで縛っておいて、翌朝行って見ると、十五センチ位のバーグレ（ナマズ）やカスクード（鎧魚）、ランバリー（小鮒に似た魚）の五・六センチ位のが取り混ぜて十匹程は入っているので、これは簡単でいいぞ、と喜んで一週間程通ったが、先ず妻から苦情が出て来た。

こんな小魚を毎日料理するのは手間がかかって大変だし、食べる方もあいてくるし、毎日取ってくるなら男の人が料理をしてほしいという事である。

私も毎朝出かけるのにも一寸嫌気がさしていたのであった。それは大した漁でもないのだから、その筈である。然し、朝見に行くと、つい又かけてくる。かけてくるから、朝がくれば又行かなければならない。

そんな事が続いていたので妻の提案で中止したのであるが、それでペスカは終わらなかった。

それから二、三ヶ月程した時、今度は竿を持って釣りに出かけた。そして気がついた事は、バーグレを一匹釣り上げると、同じ場所で同じ位の深さ迄餌を下げてやると四・五匹は釣れて、後は釣れないので場所を更える事にしているのであった。まてよ、バーグレは四・五匹宛仲間でいるのは彼らの家族ではないか、それなら川の土手に穴を掘って暮らしているかも知れない。

そう考えて、川に入って川べりを手さぐりで探したら、四・五メートルおき位に穴を作って五・六匹宛位の一家族で暮らしているのであった。

入り口は此方の手で塞がれているので逃げられない、全くの一網打尽である。かくて七・八キロの大漁を一寸の間にしたのであるが、結局はこれが、私のペスカの最後になった。

一週間程して再び手づかみの予定で行ってみると、先に空にした巣に次の家族は移転してきていないのである。又、一ヶ月程してから行ってみても来ていない。

そこで考えさせられた事は、彼らは家族を構成して暮らしていて、若い者が繁殖分家する時に新しい巣が必要なので、普段には新しい巣はいらないのだ。

そんな事に気が付いて、十数個の巣を全滅させた事が、何んともかわいそうな事をしたと後悔させられて、以来ペ

スカを楽しんだ事はないのである。
　因みにバーグレの巣の中の、殆んどに、ガサガサの皮のカスクード（鎧魚）が一匹、遊びに来ているのかいっしょに居たが、大抵一匹で二匹即ち夫婦で入っていることは一度もなかった。このカスクード何んの為に一匹で違った魚の巣の中に入っているのであろうか。遊びに来ているにしては自分の仲間はいなく自分一匹で入っているのはおかしい、何か番に雇われている様な格好であった。それに又、相当の距離をさぐって見たが、カスクードの巣らしいものは、一つも無かった。魚でも種類によって家族構成の組み方が違うのであろう。

第十二話
株売り

　世の中に平均法という自然の働きが有って、高い処の物は低い方に何時の間にか移って行く物だといわれた人が居たが、私たちの様な農家には良く理解し易い。原始林を開拓した畠では倒れた木が沢山有って、土が流されるという事に気がつかずにいたが、五・六年して木が腐れて無くなってくると雨の度毎に高い処の土が低い方に流されて困るのであった。

それで平均法とは正しいものと思っていたら、平均法とは自然の物だけではないのだ、皆さんの溜めたお金でも溜まってくると、いつの間にか無い方へ渡って行って、気がついてみると相当にへっていて、驚くものだと教えられて初めて気がつく、カフェーの好況時代のあの金どうしてなくしてしまったのか、今頃になって気がついている始末である。

それで当時を振り返って見ると、サンパウロ方面から色々な会社の株売りが来た。

義弟が買ったJ金物商店の配当金を依頼されて貰いに行った事があるが、三年分でロードビアリヤ（ターミナル）から会社迄のタクシー代しかなかった覚えがある。

サントスの某舟会杜の株は私が買ったのであるが、配当金を受取った覚えはない。全額損害をした。私もいっしょに投資するからと誘ってくれた友人は、フタをあけて見ると手数料だけ取って、一銭の投資もしていなかった。こんな人を友人と思って付き合っていたのが情けない思いであった。

又、ロンドリーナでいやパラナで指折りの有名人が、「この投資は絶対大丈夫です。万一の場合は私が保証致します」と、直接話されたが、その本人も大きくだまされたのであろう。私達の分の保証はしてくれなかった。苦しくなればしたくとも出来ない事になったのであろう。

又、ロンドリーナでも有名人が顔を揃えて重役となって農機具商を開店して資金を募った事があったが、これもお

じゃんとなってしまった。
資金作りに、インチキ・ドプリカータ（売買契約書）を作製して友人のアッシーナ（署名）でやりくりしている内に金が廻らなくなってくると、売ってない機械代を催促して喧嘩をしている処に行きあった事もある。
又、良く土地売り、インチキ反物売り、プライヤ（海水浴場）のダッタ（宅地）売りなどが来たものであった。

今考えてみれば、金廻りの良い時に、その金を目的に来ていた事が良く解る。
サンパウロのヒルトン・ホテルが建築にかかる頃、日系の三十才余りの若い人がその株売りに来た事があった。
色々と立派なカタログを見せて説明されるのであったが、此方にサンパウロへの投資の気持ちが無いので、その旨を伝えると、私が今迄にないこんな有利な詰を持って来ているのに投資しないとは何事かと叱られたのに驚いた事もあった。
又、次の様な事もあった。
私が独立して間も無い二十六・七才でまだ粗末な家に暮らしていた頃、或る日『お客さんが来ている』と、妻が畠に呼びに来た。「日本人か」と聞くと、「そうだ」と言うので家に来て見ると、都会の人と一見で解る恰好の人物が二人で来ていた。
挨拶の後お話を伺うと南米銀行の支店長と本店の者という事であった。要件を伺っていると、資本金集めをしてい

るので株を買ってほしいという事であった。私はロンドリーナ産業組合に預金してあるだけで、どの銀行とも取引はなかった。

当時は銀行は私たちの行く処ではないと思っていて、十数年というものどの銀行にも入った事さえもなかったのである。

詳々とお話を伺っている内に、この人たちの話しは立派だと思い少々ではあったが投資する事にした。この時の人が、その後南米銀行の頭取となり、先年八十余才で亡くなられた橘富士雄氏であった様である。

頭取となる人も、その創業時代には開拓前線の掘立小屋にまで、足を運んで、資金集めの苦労をされていたのであった。

そして此の南米銀行の株と、鐘紡の株は損を掛けなかった様であったが、近頃南銀は身売りをして株価は大暴落である。中には立派な会社もあったであろうが大体損をかけて終るものが大方であった。

私は此の項で書きたい事は、株の損得ではなく、ああした人達の来た時代は我々の財政の良い時代であって、今日の様に物売りの来ない時代は、此方が不景気なのである。

即ち、自然の平均法が働いていたのである。

財政が良い、幸せいっぱい、と思える時はそれをくずそうとする働きが自然に起きてくるので要注意との事である。

平均法とは人生の指針だと思う。

第十三話　木挽き（こびき）

私たちが意気揚々とロンドリーナに移転してきたのは一九三四年も早六月になろうとしていた。

急いで開拓にかかるべく、今のジャルジン・シャングーリラ（市街地の名）が、北パラナ土地会社の直営するコーヒー園で、その川向いに土地が決まったので、早速此の耕

地を訪ねて、ここに契約していた天野氏のパイオーラ（物置小屋）を借りて、早速開拓にかかる事になった。

このパイオーラには半分仕切って収穫した棉が置いてあったので、その棉の上に寝たのであるが、大いに助かったわけである。

この耕地は殆んどが日本人の契約者であった。

私たちは、そこから通って原始林の開拓をしていたが、その内に更に土地に近い松原さんの物置きが空いたとてそこへ引越した。そこから家を立てて移転し更にその後、川辺りに立てた家が仕事に不便だという事で、少し高い処へ移転するのであったが、その二軒目の家も柱に太い木をつかったが、埋め方が浅かったのですぐ傾いてきたので、三軒目の家を立てると、丸太小屋でも造り方に慣れてきて、やや人並の家が出来てうれしかったものである。そうしている内に数年は過ぎて行ったのであるが、植民地には殆んどがまだパルミット壁（ヤシの木の壁）の家で暮らしていて、私の家で五年目一九三八年に製材を木工場から買ってきて家を立てると、植民地でも極く早い方であった。

そこでロンドリーナ市に木工場が出来たのはいつ頃であったかと思うのであるが、木工場は私達が入植した一九三四年には既に有った筈だと思う。

なぜかといえば、その頃の市街には三、四百戸の人家が有った様に思うのである。木工場なしにあれだけの家を建てる事は大変である。

然し本当の初期即ち三一・二年頃は、外人の木挽達が、

原木を高いやぐらの上にあげて、上と下との二人で板を引く方法で製材した物を材料として大工様が働いたとの記録が残っているのである。日本人の大工職として最初に来た座光寺与市氏も外人の木挽の引く材料を使って仕事をしたと言われている。

外人達の使う木挽鋸は薄い五センチ巾位の鋸なので、四本の細い棒の様なもので枠を作って止め、原木の上と下と二人でその枠の上下を持って引くもので、案外良く切れる様であったが、出来上がった品物は日本人の木挽が、五〇センチ角程も有るあの独特の木挽鋸で引いたものよりは落ちる様であった。それは鋸の巾の違いであったろうと思われた。

又、セラトンと言ってトランサドールの様で長いちょっと三角形をした鋸を使う人もいた。これも上・下の二人びきであった。この方は主に大木を挽いたのである。

それで、此の項で書いて置きたいと思った逸話が有るので紹介して置くことにする。

ロンドリーナに草分けとして移転して来たのは北海道人の荒義雄氏一家である。一九三一年十月八日にファゼンダ・コアチーに三年契約を結んで入植したという。それより一週間遅れた十月四日に、原国次郎、風早慶味、早坂幸太郎の三家族が一区の自分の土地に入植すべく到着されたそうである。従って此の四氏を草分け者と見るべきかと思うが、それは別として、此の時移転してきた原氏兄弟が、北海道開拓の経験を生かして木挽をされて、ペローバの大

木を板に引いた実績は、記録に残して置かなければならない事実談である。当時の記録では、外国人の木挽鋸では大木はとても原氏の様にきれいには挽けなかったらしく、原兄弟の実績を喜んだ、ドツトール・トーマス北パラナ土地会杜の総支配人は、原氏はロンドリーナ市街地創建の功労者であると褒められると共に、氏がマリアルバへ移転するに当っては感謝状を贈り更に地価に特別な計らいをして報いられたという事である。

この一件からしても日本人の発明になる木挽鋸は記念品として遺さるるべきものであるが、現在幾つか残っているものを見ても、一枚一枚の鋸の歯にノコクズの出易い為の仕掛けか、チョンガケという細工をヤスリでスリ込んで置くらしいのであるが、その細工の残っている物はなかなか見当らない。若しチョンガケの残っているものが有ったら移民資料館に頂きたいも　のである。日本人の考案した技術の一つとして残して置きたいのである。

第十四話
身体障害者

私が身体障害者の事について気がつき出したのは十七・八才の頃であった。

植民地にグランドが出来て青年たちが野球を楽しむよう

になると、直ぐに女子青年会の結成もされて、野球の試合などがあると、先ず応援に出てきて花を添えて良かったのである。

そうして二、三年した頃妹が十四・五才になってボツボツ女子青年会に誘われるようになると、その友だちが我が家にも出入りする様になってきた。

その友だちの一人がいつもハンカチで片方の手を巻いているのが気になって妹に聞いてみると、その娘の親指が生まれつきに平らにつぶれていて恰好がわるいのが恥ずかしいといってつつんでいるのだという事であった。

『かわいらしい娘であるのに、かわいそうに』と、思った。

その頃から身体障害者について考えるようになってきたようである。

身体障害者に対するかかわりは移住以前にも近所に唖の子供がいたし、ロンドリーナに移ると同じ植民地に白痴の五才位の女の子が居たが、その障害者が、どうして、そのような姿に生まれてきたのか、又、何％位いるものかと気になり出したのである。

気になるので、自然目にも付く、人にも聞くと、案外に気の毒と思える人が居るのであった。

小指の脇や親指の脇にもう一本の細い指が有ったと、いう子もいた。此の場合は大抵幼い内に取り除いて分からない様になっていたが、私の耕地の労働者に一人いて六本指

というものを見たが、指として間に合う様なものではなかった。

指の欠陥では、片手の指が五本共、生まれたまま太らなくて、手の平は普通に成長したという人がいた。指が無いのかと思ったら、二センチ位の指はあるのだが全然用は足さないのである。それでいて此の人大変元気でエンシャーダでもマッシャード（斧）でも使うし、労働者を使って請負い仕事でデルーバ・マット（伐採）でも何んでもしてくれるのであった。

結局障害者でも頭脳に欠陥が無ければ、普通に教育も受けられるし、仕事も体力に合わせて出来るので幸いであるが、頑脳がいかれていると保護者が必要なので気の毒という事になる。

モンゴール児とか、頭脳のいかれている者は余り長生きが出来ない統計になっているらしいが、時には大変長命の人もいて心配して面倒を見ている母親が老齢で亡くなる事になっても生きている場合もあって、気の毒と思うことがある。

そこで、そうした障害者が人口に対して何％位生まれているものかと、近所を調べてみると二％位はいるらしいのであった。移住者や初期の人には平均しても数人の子供は産んでいたから、十夫婦に一人の割合に障害者がいる事は案外に多いパーセントだと、私は結婚初期には心配していたのであった。

然し、幸いにして十人のきょうだいも、四人の子供も普通であったので感謝しているのである。

障害者が親の酒乱の原因で生まれていると思われる事もあるが、酒の飲めない立派な親にも生まれている例が多いので、その原因は分からないのでお産は心配なものであった。

或る人は遺伝でないかという人もいたが、当然遺伝という事はあると思えるけれど、大体の家系で三、四代前に逆上ると障害者がいたか、どうかということは判明しないので、どうしようもないのである。

そう、こうしている内に精薄児のお世話をしてくれている子供の園の先生の講演を聞く機会を得た。先生はその時「ブラジルの日系人の中では四％は確実に障害者が生まれているので、そうした児童の世話をする機関の完備の必要と、普通の子供を授かった人は、その幸いを深く感謝して下さい」と、言われたが、本当だと思った。

学校の一回や二回すべっても何んの事やある。

近所にロンドリーナの学校へ入ったので来ていた学生が五年の大学を十年かけて一昨年卒業して行った。一寸ひどいなと思ったが、今では結婚して有名会杜に勤めて落ち着いている。明るい良い人である。

私たちは幸福の標準の置場で、楽しく感謝でおくれる人生を、不平不満で暮らしている様な失敗をしていないかと反省している次第である。

第十五話　判コと署名

親は渡伯の時、大事そうに実印と認め用の判と二つの判（カリンボ）を持参して来たが、着伯してからは一度も使う事はなかった様である。

此方では書類には判の必要はなく、署名（アッシナツーラ）で済むからである。

着伯の翌年、セッテ・バーラス植民地から移転してくる時、初年度の土地の入金をして、入植し、二アルケールを開拓して、粗末でも住宅もたてて只で置いて来たのに船着

場でおさえられて、二年目の地代の年斌支払いを要求して聞かず、パラナに来てからの開拓資金をモギ取られたので、三ヶ月目頃からあるものの売り喰いをしなければならなかった。

母が大切そうに持参してきた、新しい来客用のフトンが先ず売れて助かり、父の懐中時計は預けた人にドロンされて無くなった。

切り倒したジャングルを焼いてから植えつける作物の収穫迄どうして喰いつなげるかと心配している時、急に暴騰した米が、再び暴落してきたので、仕入れた前の値で借りてくれる人がいれば来年払いにすると言う人が出て、来年迄の分として五俵の白米を借りる事になって、実印（自分の判コ）を持って出かけたのであったが、此の国では名前を書いただけで、判を押さないですんだ、おかしな国だ、と言いながらも喜んで帰ってきた。

渡伯して実印を持って出たのは、この時が初めてで最後になったのである。

それからというもの会社から土地を買うにも、物を売った代金の受取証にも全て実印の替りにサインするだけで済んでいくのであるが、両親には理解しにくく、何んとなくちょっと不安の様であった。

私たちが、判も判コ職人が造るもので悪い判コ屋さんであれば幾らでも偽造出来るのでサインより不安でないかと言って見ても、長年慣れて来ている習慣で、若い者の様に

かんたんに此方の習慣にはなじめないのであった。
　我々はすぐに慣れてゆくのであったが、ちょっと困る事は、当時の労働者では半数以上が文盲で自分の名前も書けない事であった。
　此の事で隣りの石川氏のいう事に、信ちゃん名前の書けない人にはなにも名前を書かせないで、只の〇か三角を三つ程書かせて置けば良い、大勢いても同じ〇や△を書く者は先ずいないもので、各自それぞれ違った〇や△を書くから、勘定を受取ったという証拠にはなるものだと言われたが、試しに〇や△を書かせてみると全く十人十色に書くのであった。
　それで私たち若い者は署名という事に何んの抵抗もなくなじんでいくのであった。

　渡伯三十年程して初めて帰国した時、帰る船の都合で滞在が三ヶ月を二、三日超過する事になって、滞在延期願いを届けに行くと、書類はかんたんに作ってくれたのであるが、「ハイ、此処へ判を押して下さい」という事になってびっくりした。
　私は白分の判コなど持っていないのである。従ってその旨を話すと、
「しかたがありませんなあ、日本では判コを押して頂かないと証明になりませんので、すぐ近くに判コ屋さんが有りますので沼田という判コを買って来て下さい」
　と、言って判コ屋さんを教えてくれたので行って見る

と、沼田という安い判コの出来合いがあって間にあったのである。
　然し考えて見れば誠におかしな話である。そこらの道端で五レアール程で売っている判を押した書類には安心が持てるという先進国日本の役所の考え方、とても当国人にはなっとくの出来ない事である。
　結局は悪い事をする者は、どちらでもするのであるから同じ事であるのかも知れない。ただ習慣の違いで安心の感じ方が違うだけの事であろう。

第十六話
除　名

　渡伯して二・三年目頃であったか、どこかの植民地で、何かにつけて反対して困る植民者を、日本人会より除名しなければしかたがないという状態がおきた事があった。
　その時、父がいわれた言葉が強く耳に残っているので、その後、新聞紙上などで、県人会のもめ事の後の除名広告など見て『まずいな』と思うのである。
　父が言うには、日本に居た時、『追分け親睦会』に加入して月例でけいこと会食をして楽しんでいたが、或る会員が加入しながら殆んど出席しないので除名する事になって父は反対したが決定した。それが、たまたま私の家での練

習日であった。決定したので誰かが通知したのであろうが、後になってから、沼田の家で決議したという事で、私が一番ににくまれる事になった。従って、そうした相談が持ち上がった時は決して宿を貸してはいけないし、又、除名という事をしてはいけないという注意であった。

それで私はそうした件については注意していたが三十年程前に、何も分からずに某会合に誘われて二、三度顔を出すと、世話をしている人から或る日突然、今夜私の家で集まりをしてほしいと頼まれて、五・六人の集まりだからと承知すると、四人程集まって遠くから来た人に言いにくそうに、再びロンドリーナに来ない様にと断りを言われたのでおどろいた事がある。

此の人達私にこの寄り合いを続けるべく誘っておいて、今日はその指導者にもう来ないようにと断りを言うとはどうした事かと思った。

この問題はそれ程悪い尾を引かなかったから良かったが、父の注意が有って用心していたのに突然利用される事になって驚いた。

学校で広く会議をおこし万機公論に決すべしと教えられてきたが、世界の問題でも国連の協議でも、いよいよ最後になると強大国の拒否権によって、多数決とはならないし、最近のフランスの様に原爆の実験でもやるだけやったら止めると勝手な理屈を通すものがいても簡単に除名も出

来ず、よって、たかってつぶしてしまうという事も出来ない。

従って我々の小さな植民地や日本人会、県人会、或いは何かの愛好会、生花の会、その他で、もめたあげくに脱退するという者があっても決して除名はしない方が良い。

除名される側は少人数或いは一個人で、する側は大人数であるから、勢いが有ってこんな分からず屋は除名してしまえとなり易いが、責任者は将来を熟考して出来る限り除名という手段は取らない方が良いと思う。

私は或る植民地で個人の感情のもつれはないのに団体として利益にならないという事で複数の家族を除名した事を知っているが、そのしこりが残っていて三十年にもなろうとしていても容易にしっくりとなれない模様である。

若しあの時に除名せずに、無干渉としておいたならば、この三十年を待たずに円満解決が出来ていたと思うのである。

私はここで書いて置きたい事は、父の残した『除名はするな、除名をする相談には宿を貸すな』と言う言葉を守っていきたいと思っているのである。

お互いに長い人生、思うようでない事に行き合う事はあるものだから、少々の口論はしても除名したり、されたりしない様に注意していきたい。

第十七話　あるカザメント（結婚式）

一九三八・九年頃の正月前の暑い時期に植民地の有力者の家庭にカザメントが有り、家長は殆んど全員、青年も相当数招待を受けての盛大な披露の宴が開かれたのであった。母は二、三日前から手伝いに出かけていた。

財政も安定している家であったので、植民地では初めてピンガから清酒、東山の東鳳に替った宴会であった。

清酒はピンガに比べて弱いから青年達も相当に飲む事であろうと料理係の赤松氏と良くよく相談の上、更に多目にと、相当な本数が準備されたので、その事が手伝いに上った人の口から忽ち伝わっていて皆さんが期待を持って集まって行ったのであった。私の家からも父と兄が招かれて行った。

然しいよいよ宴もたけなわになると番狂わせがきた。ピンガに慣れている一般には、清酒では飲んでも飲んでも酔わなかったという。

又、その晩の酔わないのにはもう一つの理由もあったらしい。いわゆる爛をして飲んで頂きたいという事になって大きな鍋に湯を沸して、十本宛位は爛をしたらしいのであるが、二回目からは熱湯に直接入れるとビンが割れるのが出るので、水を足して温度を下げてすると暇がかかり、飲む方に十分に間に合わない。

昔は今と違って九時や十時で帰る人は居ないので、酔いが醒める頃に次のが出て来る様では、飲んでも飲んでも酔えない。

そうしている内に誰かが気が付いてビンに割箸を一本立てて欄をすると熱湯に入れてもわれない事が解り、捗る事にはなったらしいが、酔うに暇が掛かりすぎたので、さしも充分だと準備してあった酒のストツクが底をついてきたのであった。

さあ、どうすると言っても、今の様に車が有るわけでは

なし町には七、八キロも有るので、とても間に合わない話である。

そこで料理人の赤松氏が考えた、氏は飲まない人で冷静であった。此の調子ではとても足りない、仕方が無いから、これからは三分の一位ピンガを混ぜ様、味もそう不味くなる物でもなし、お客は分かっても却って酔えると喜んで下さるだろう、と言う事になった。

この混合酒になってからは忽ち酔いが廻って座は賑わい、植民地としては久し振りの様な盛大な披露宴になったので当家の人々も安心したのであったが、十二時を過ぎてボツボツと帰る人が出て来た頃、酔った人達は仲々帰ろうとしないで騒いでいるのであった。後の話であるが、若い者など飲みなれないものは腰が抜けて帰ろうにも足が立たない、即ち歩けなかったという事であった。

父は帰宅したが、兄は、会場から四、五〇メートルのカフェザール迄、やっと這う様にしてきてカフェーの木の下にもぐり込んでねてしまい、翌朝明るくなってから起きて見ると、木の下にねたのは自分だけではなく、「お前もか、お前もか」と、十数人が起き出してきたと言う事であった。温かい夏で良かったが着物はメチャクチャであった。さすがに老練な先輩は相当に飲んで酔っていた筈なのに、カフェーの木の下に這い込む様な人は居なかったとの事であった。

私は後に話を聞いただけであるが、忘れられないカザメ

ントの一つである。

又、宴会も当初はピンガであったものが、次第に清酒になりそうにして清酒の宴会は殆んど少なくセルベージャへと更っていくのであるが、ピンガに慣れた人には、容易に弱い酒では満足出来ないようで、宴が盛り上がってくる頃には、

「オーイ、ピンガ持ってこーい」

「こんな水みたいな物では酔えるかあー」

と、ピンガの催促が有ったものである。思えば、本当の移民の苦労をされた、ピンガ党と言いたい先輩が、宴会の場を賑わしてくれていたのでその殆んどが他界されて行かれた事はなんとも淋しい気がするのである。

然しピンガ党だからとて皆がみな短命であったわけではない。人間何時迄も生きられるわけのものではないので、六十年もたてば仕方がない事である。冥福を祈る次第である。

第十八話
新妻の盲腸炎

一九四一年七月十二日が私達の結婚式の日であり、四十日程してから妻に里帰りをさせる事になった。

カンバラに親戚があったので、そこ迄一人で行き、二日おくれて兄嫁さん（妻の姉）がカンバラで落ち合う事にして出かけ、カンバラからバストスの里へ行って十数日ぶりに帰って来たのであるが、帰るとその夜から腹が痛み出したのである。

大変に痛がるので医者に診察してもらうべくちょうど、カフェーが売ってあって出荷の便があったので連れて出て、町の中は丹氏のタクシーで歩く。先ずドットール・カイオに診てもらうのが良かろうと、丹氏のお世話で伺ったのであるが、幸いにすぐに診察してくれたのは有難いが、

「急性盲腸炎だから急いで手術しないとならない」

という診断で困った事になったと心配させられたが、待てよ、手術するにしても、誤診ということもあるから、もう一人の医者に診てもらいたいと丹氏にいうと、

「それでは土地会社の医師に診てもらうか」

と、言って教会の前側に診療所のあったドットールを訪ねた。名前は忘れたが、このドットールも良く診ているので、やはり同じ事をいいそうに感じて手術なら手術でしかたがないと大分決心を固めていると、診察を終えたドツ

トールは静かに、これは盲腸ではないと思う、汽車の旅行中に冷えて腹痛をおこしていると思うから、ファルマシヤ（薬局）で『シバレーナ』という丸薬を少し買って、ファルマシヤで一粒飲んで、寝る前にもう一粒飲めば大てい良くなるだろう、寝る時は温くしてねるようにといわれ、若しそれで明日になっても治らない時は、又来るようにとの事で私はあっけにとられた。

手術を覚悟していたのにコンプリミード（丸薬）の二、三粒で治るだろうとは有難い。

早速ファルマッシヤで一粒飲んで、そのまま丹氏のタクシーで帰って来たのであった。

幸いに二、三粒のシバレーナで治ってしまった。妻もよろこんだ、嫁に来て二ケ月程で切開手術するなど申し訳ないと心配していたという。病気の事だからいつ、どこでかかるかわからない事であるが、本人にすれば、そんな気持ちにもなるかと思った。

私は私で、当時は盲腸の手術位でもマヤクがさめないで亡くなる人が時々いたので、そんな事になったらと心配していたのであった。

それからは妻も健康、私も案外に健康で過したのであるが、十七、八年した頃、妻は本当の盲腸炎にみまわれたのであった。

その頃、私の家族はロンドリーナに出ていて弟らはローランジヤのファゼンダを守ってくれていたので、タペ

ジャーラ区へ拡張した仕事を私が見に行く事が多かった。
月曜か、火曜に出かけて土曜には帰って来る事にしていた。私は家を空ける事は一週間以上にはならない様にと気を付けていた。
その日も一週間振りに家族とたのしいジャンタが出来ると心も軽く帰ってくると、子供たちが
「母さんは病院に入院している」
と、心配そうな顔をしているのであった。兄の家に電話すると、
「お前の帰りを待ちたかったが、医者がとても待っておれん、破裂してしまうというので切ってもらったが、順調ですぐ退院だ」
と、いう事で安心した。
結婚して五十八年（一九九九）、私達夫婦は弱い者が一しょになったのに二度の盲腸さわぎは有ったが、病気らしい病気にもかからず、早くも八十才に届くことになって、良くもここ迄来たものだと喜んでいるのである。
人間の寿命は予想出来るものではないのである。巡り合せが悪ければ自分の命を自分で断たなければならない事さえ起きてくるのである。

第十九話
不動産

友だちが、或る時温泉に遊びに行くというので聞いてみると、友達同志二十名余りで、その温泉郷に敷地を購入してバス一台分位の人数の宿泊施設を造ってあるとの事であった。世話係に連絡していくなら、団体でも個人でも自由に利用出来るので安上りで便利との事であった。

普段の維持は夫婦者の住める家を一棟別に建てて無料で貸し、その替りとして敷地のリンペーザ（手入れ）と家の内のリンペーザと留守番をしてもらっているので、何時でも利用できる事になっているとの事であった。

仲々面白い便利な考えで共同出資者もすぐに集まり施設は完成したのであるが、暫くすると次第に利用する者が少なくなり、その内にボツボツと亡くなる者が出てくるのが世の中である。

施設は不動産であるから毎年税金はかかる。亡くなれば、その人の遺産相続に入る。一寸の業しみに仲間になったので財産としての考えも持たず亡くなっても遺産相続の中に入れてない人も出来る。法律上は不動産であるからややこしい事になってその友だちも苦労している様子であった。

遺族の人から、あんな物は何うなっても構いません、といわれても法律上は不動産であるから、構いませんではす

まない。本人が亡くなれば遺族の委任状が必要となってくる。遠方に移転でもしていると大変である。

「あんな物はそちらで良い様にしまつして置いて下さい」

と、いわれる人が大方であるが責任者には、そう勝手に片付けるわけにいかないのが不動産である。

若い時は気の合う友達で海岸に家を建てようとか、シャーカラを造ろうとか簡単に出資する事があるが、不動産は後に面倒な事となってくるものである。特に若い時は死というものが、遠い、当分若い者には縁の無い様に思っているが、実際には案外に早く始まるものである。

十人のソーシオ（共同）で始めると夫婦で二十人である。三十代或は四十代で若いと思っていても、現代のブラジルでは、年間二万人～三万人の車の事故死が有る。

突発的病気も有る。先日、知り合いの者が朝起きて裏庭に出て日課の体操をしていた。二二、三、四とかける、号令を聞きながら夫人がカフェーを用意して、出来上ったので主人を呼ぶと返事がない。裏口へ行って見ると、引っ繰り返っているので、びっくりして医者を呼んだのであるが、心臓麻痺で帰らぬ人となっていたとの事であった。

かくの如く人の命とは全くいつ終るか分からないものであるから、不動産を共同で求める事は余程注意をしておかないと面倒な事になる。

私も同じ様な事を世話した事があり、その友だちの苦労が理解出来るのである。

私は幸い長生きしたので、なんとか整理が出来て助かったが、経験上、不動産には注意をして頂きたいと思うのである。

又、不動産を買ってエスクリツーラを取るとシーザという税金がかかるので、セッソンニア・ヂレイトを受取っておけば、税金はない上に権利は出来るので得だという人がいて、セッソン・デ・ヂレイトを貰ってすまして置いた事があったが、税金を払わなければ、やはりそれだけの欠点があるもので、エスクリツーラの役はしない。やはり不動産は、エスクリツーラを取って初めて自分の物といえるものらしい。

（エスクリツーラ＝財産登録）

第二十話　ダイナマイト

我々の日常生活は、色々と先人先輩のお世話になっているので、その恩に報いる考えを忘れないことが大切だと聞いた事がある。

うっかりしていると気が付かずに過ごしているが、注意してみると全く沢山あるものだ。

いや有るのが当然、総てのものが先人先輩の発明品であ

り、発見されたものであって、それらの物に守られて私たちの生活が成り立っているのである。

例えば山に自然に生えていたコンニャクイモは、うっかり皮をむいても手の皮膚があれて困る物を、更に石灰を解いた水を入れなければコンニャクにならない。そのコンニャクのない時代に、どうしてコンニャクに作ればおいしく食べられると考えついたのか、不思議でならない。

若しこのイモの原産地が日本でなければ、日本へ伝わる途中の国々で、果してコンニャクを発明して食べているかどうかを知りたい。

又、山の石を焼いて作ってあるセメントにしても、砂と水とに混ぜておくと元の石のように固まってくれるので有りがたい。以前に砂地を開拓した時、カフェーのテレーロ（乾燥場）を畠の土に十分の一のセメントを混ぜて造っているのを見たが、結構間に合っているのであった。

又、このセメントの発明で三十階五十階のビルも建てられているのである。

更に堅い石や石の盤を割ってくれるダイナマイトなども、何を原料にしているのか知らないが、その偉力には驚かされる。

ダイナマイトそのものは少し削って火に投げ込んでみたが何も破裂しなかった。又、私の処にいたずらに食べるカマラーダ（労働者）がいたが別に何事もなかった。然しいったんエスポレッタ（雷管）を差し込んで導火線で火を送ると大変な力で破裂するのである。

学問の無い此方の井戸掘稼業のカマラーダ（労働者）たちが使っているのだから、注意をして使えば大丈夫と『メクラ蛇に怖じず』のことわざ通り、何本の井戸を掘っても盤に行き当るので、良しそれではダイナマイトを使って盤を掘り抜いてやろうと、私たち兄弟で岩盤に向かって挑戦したのであった。私が三十才、弟がそれぞれ二十五才に二十才であった。若い勢いであっただろう。又、セーラ・モレーナの鉄道駅の井戸が地表からの岩盤を打ち抜いてあるのを見ていたので外人さえ掘っているのであるから我々に出来ない事はない、一日に平均して一センチ掘り進んでも百日すれば一メートルは掘り進むと計算して取りかかったが、一ケ月、二ケ月と日はたっても、平均にして一日一センチは掘れない上に危険が思ったより多いのであった。

一回に三発ずつ仕かけたが時々不発するのがあるので、その始末が危険なのである。それで半年位で中止した。

仕事は中止したのであるが、残ったダイナマイトを捨て場に困って、それを持ったままローランジヤにファゼンダ（耕地）を買って移転してきて、その為に末の弟が恐ろしい目に遭う事になるのであった。

それは畠の作道に大きな玉石が頭を出していてじゃまになるのでダイナマイトで砕けば簡単と、道具棚の上に始末して置いたのに気が付いて、一発仕かける事になったのである。私の留守中の出来事である。

地上に出ている玉石を割るのは至極簡単であるから弟が気の付いたのは当然であるが、問題は破裂する時の石の破

片の飛ぶ距離である。井戸の中では口に板を並べて置けばそれですむが、畠の広い処では、横に百メートル位は楽々と飛んで行くので、自分達はかくれても近くで働いている人がいると危険である。

弟たちはかくれて導火線に火を付けて見守っていると、爆発と共に近くに有った三、四十メートルもある木の枝が、飛んだ石に切られて落ちてくるし、その勢いで四方に飛んだ石片で労働者が怪我をしなかったかと思うと背筋に冷水をかけられた様な気持ちにさせられたとの事であった。この時、残りのダイナマイトは深い穴を掘って処理してしまった。護身用の銃器で怪我をする事が案外に多い様に危険物は持たない方が良いと思う。

弟は此の時の恐ろしさを、今でも時々話題にするのである。

第二十一話
二コントスの住宅

五十才で移住してきた父には、百姓の経験があったとはいえ、二十二、三年も町で商売をしていたので、着伯五日目頃から原始林の開拓に取りかかったのであるから大変であったと思う。

体重も五〇キロ程度の百姓向きの人ではなかった。

私たち子供は父に従って出来るだけの仕事をしていればよかったのであったから、楽しく、つらいと思うことはなかった。それでも一日下草刈りにフォイセ　（大鎌）を振るった翌日には、手がいたくてフォイセが捏れなくて困った記憶がある。

それも三十分もするとなれてきて仕事が出来るようになるのであった。一週間もしない内に一アルケールのロッサ（下草刈り）をすませて、いよいよ木を倒す事になったが、兄は十八才で元気であったから父には少しは足しになったが、私は日本を出る迄、医者通いをしていた十五才の少年で何んの足しにもならなかった筈であるが、仕事を休むという事もなく、木を切る事になればマッシャード　（斧）を持って毎日出かけたのである。もちろん私は細い木ばかりを切っていたのであった。直径三十センチも有ると、それは父と兄が倒していった。

木を倒し出した初日の午後であった。父が「うっかりしていて手のひらの皮をむいてしまった」といって手を出して見せたが、左の手のひらが四センチ直径程べらっと皮がはがれていた。

困った事になったと思って見ていたが、どうして良いかわからない。と、父は腰にぶら下げていたタオルをさいて包帯替りにして仕事を続けたのである。

子供が余り頼りにならないので、主力の父にどうしても負担がかかっていくのであった。

一ケ月程で、一アルケール　（約二町五反）を伐採し、請

負わせた分と二アルケールの枝おろしをして良く焼けるようにしておいて、干せるのを待つ事になったのであるが、少し高い所から望見すると美事な伐採地になっていた。
一ケ月程乾かして火をつけると大変良く焼けて早速アロース（稲）の蒔き付けとなり、良く出来たのであるが、水溜りや泥炭地が有って良い土の面積が少なく僅か八十余俵の収穫であった。

このモミを畠から家迄運ぶのに、父は一俵かつぐのに、兄は父に手伝って肩にのせてもらって運ぶ始末、私は半俵ずつにして運ぶという状態であったから、体重五〇キロそこそこの父にはどうしても負担がかかっていった事と思う。
翌年にはパラナへ移転して再び原始林に取り組む事になったが、その頃から私たちにも次第に力がついてきて足しになっていったので、パラナの三年目にはセレアエスだけの収穫で地代の年賦を払いながら、第一回目の拡張に二十アルケール（約五十町歩）の土地を購入したのであった。父と私が初めに視察、続いて私と兄が確認に行って確定し近く移転しようと希望に燃えている矢先に父が発病し、二ケ月目にはかなくも他界してしまった。
渡伯四年目に拡張ができたので希望の十年目には帰国が出来ると思った矢先の父の死で、おどろいたのであるが、この時母が、
「こうなったのには、住宅がパルミットの丸太小屋で風が

入りすぎて体に悪かったかも知れん。結局は家族の健康が大切だから、仕事の拡張より先に板壁の住宅を建てる事だ」

といわれ早速に、パリヤーノ区に住んでいた大工業の高木氏を頼んで、建築に取りかかった。六メートルに八メートルの母家に、四メートル角の炊事場を付けて、瓦は、今のイガッポ湖に沈んだかも知れない水淵氏の瓦工場の一級品で葺いた。千枚三百ミルレースであった。高木氏の手間賃は日当で精算した。一日当り二十ミルレースであった。

高木氏が一人手伝いがほしいと言うので私が手伝ったのであるが、これが私の一生に大きく役立っているのである。

総面積六十四平方メートルの床も天井もない家ではあったが、総額二コントス（二・〇〇〇ミルレース）で出来上った。カマラーダ（労働者）の日当が七、八ミルレースの時代で、高い、安いは想像におまかせして置くが、こんな粗末な家でも、当時としては中央区の一組では初めてであり、二組では槙枝氏と思うが一軒しかなく、一般はパルミット建ての家で十年近く辛抱したのであった。

一九三三年サントスで船中の小遣いの余りを換算した時、一円が四ミルレース位、一ドルが七ミルレース位であったかと思う。

第二十二話

家たて

二コントスで製材の家を立てた事を書いていたら、それ迄に掘立小屋を五軒も立てて移転していた事に気づき、移住して五年足らずの間に良くも立てたものと当時を振り返って考えさせられるのである。

初めの小屋は、ブラジルに着いて四日目位にセッテ・バーラス植民地のマンパウロ区の会社の移民収容所に移転し、三日目位から始まったと思う。

日本を出発前に知り合った三家族が並んで、土地を買ったのであるが、その一人の土地に現地人（土人）が拓いて何かを作って後を荒してあったので先ず、そこへ三家族の住める長屋を立てて移れば、収容所より四キロ近くなるというので早速五メートルの巾で十五メートル程の家を立てた。三、四日で出来たが、何んとも粗末な小屋で大風がきたら、すぐ倒れそうな出来であったが、三ケ月も住めれば良いという事で、すぐに、そこへ移った。私たちは大家族だったので六メートル程もらって中央に入った。此所への引越しは、家族中でかついだのであった。

都会から、全くのジャングルの中にきたのであるが、希望に燃えていたので、あきらめ、不満を言う者はいなかった。

その家の前に大きな湿地があって、夜になると沢山の蛙

がグワッグアツと賑やかに鳴くのであった。その鳴き声からして相当大きいもののいる事も分かった。その光景は賑やかと言っても如何にも山奥らしく淋しいものであった。

時は既に八月十日頃になって来た。今月の内に伐採をしないと、時期を失するという事で不満などいっているひまも無かったのであろう。

此所に引越しすると早速、各自が自分の土地の伐採に取りかかり、予定の面積を切り倒したのである。

九月の初め頃に伐採は終わったので、早速自分の土地に自分の家を建てる準備に取りかかった。一ケ月余りのデルバーダ（伐採地）の乾燥する間に殆んど出来上がって、植付けする時には既に引越していた。五メートルに十メートル位の建坪で三メートル程が土間で、炊事場兼食堂、残りがパルミットの床張りで七メートルの所に九人がゴロ寝で、片側に荷物が置いてあった。

此の家を建てている途中でセッテ・バーラスは見込みがないという事に気がつくのであるが、その事は既に書いたのではぶく。

此の家に半年そこそこで、翌年パラナに移転し、六月から伐採にかかり、二アルケール少し越す程倒してから、焼く迄の間にと三軒目の家を建てる事になる。水を川の湧水に頼ったので川に近い所にたてた。

誰の指導か屋根をパルミットの二ツ割を芯を取って樋の様にして並べて、それに同じ様に上からもかぶせたので理

屈では雨の洩らない予算であったが、パルミットも三メートルもあると曲るもの有り、又、大雨では相当の雨量になるので樋に溢れて案外に洩るのであった。

尚、洩る上に、屋根一面にパルミットを乗せたので相当の重量で、案外に早く家全体がかたむき出したのである。

そうこうしている内に川辺りより百五十メートル程登った所に町に続く道路が開通したので、その近くに次の家をたてる事になった。井戸を掘ると十三メートル程で良い水が出たのである。

此の家から柾葺になった。もちろん柾は自分で割ったものである。此の四軒目でやっと雨洩りの少ない家に住めるようになったのでよろこんだのであるが、此の家も長く住めなかった。

というのは案外に太い柱を利用したのであったが、埋め方が浅かったので、この家も間も無く傾きだしたのである。

それで五軒目の家をたてるのであるが、何回も失敗の経験をしたので、次の家はやや世間並の家が出来た。部屋も、親の部屋、男の兄弟の部屋、女のきょうだいの部屋などがあって喜んだのであった。

振り返ってみると、入植当時は軒並にパルミット利用の掘立小屋をたてたのであるが、町育ちの私たちは全く下手であった。

隣りの石川さん、向いの二組の頼則、吉村さん、三組の曽我部三きょうだい、遠国さんなど、大変上手にたてて

られて、それが参考になって五軒目にやっとやや人並に近いものが出来たのであったが、こんなことにまごついている問に開拓者としての経験が積まさってきたのか、小屋たての落第生がその後、次々と十ケ所に近い耕地の開拓を手がけるのであった。

第二十三話　行商

或る時、反物を売りに来た行商人がいた。「勤めていた

店が破産する事になってエストッケ（残品）を市価の半値で良いから売って来い」と、いわれて、歩いている。一個十キロ位の包みで幾らという事である。

断っても仲々簡単に引上げない。

「此のコロニヤ　（日系人社全）　では誰が買った、誰も買った。あなた方も今日を逃したら、私たちは再び戻っては来ないのだから、悪い事は言わないから、せめて一包みでも買っておきなさい」

と、言葉上手に話を切らず容易に引き上げないので、帰すつもりで、「良し半値にするなら買おうか」などと、いうものなら、引っかかったも同然。

「そんな無茶な事は出来ません。初めから市価の半値以下の値だんでおねがいしているのですからね、それでも此方では無理に買って頂くのですからもう二割引いて置きましょう。どうですか」

とくる。此方が弱気になって折れれば向こうのつけ目、どこまでも半値と突っ張れば、しまいには半値ででも置いていくのであった。それはそれで商売になるようにだますためのインチキ商品を持って歩いているのであった。

後日、町に仕立に持って行くと沼田さんも引っかかったのか、これでは縫賃を払う値もないよ、一回洗ったらおかしくなるというのであった。

或る時は、イタリアから移民でくるのに洋服地を持って来たが、小道いに困るので安く売るから買ってくれと私た

ちの様な下手な言葉を使って洋服の布地を売りに来た者もいたが、結局同じインチキ商売で、買った人はひどい損害をしたのであった。

又或る時日本人の三十五・六才の男が扇形に切った板に七福神の人形をレンガと同じ土で焼いた、大変に粗末な物を張り付けて売りに来た事があった。

あまり粗末な出来なので買う気にはなれず断ると、

「福の神を持って来たのに買わないと言う事があるか」

と立腹されたのには驚いた事もあった。

又、或る時、皇太神宮の御札を売りに来た人もあった。後日談であるが、此の人は自分で書いて売って歩いたという事で悪口をいう人もいたが、神様を拝ませたのであるから罪にはならないかも知れない。

それにこれは最近の話であるが、早、昔話の様に消えようとしているものに健康パット売りがある。あれ程売り子を熱中させたのに、火の消えた様に世間の話題から消えうせたのは一寸不思議な現象である。

此の地方には売り尽くしたので、他の地方に販売先を替えたのかも知れない。

又、行商とは少し売物が違うが、随分と色々な町のダッタ（宅地）売りも歩いたものであった。悪口であろうけれどもサンパウロのダッタという事で買って行って見たら、サント・アマーロの湖の中であったとか、確かめに行くと実在しなかったとか、とんでもない人の住める様な所では

なかったとか、いずれもだまされたという話が、面白く話題となるから、大方がだまされた様な噂になるが、実際にはまじめな仕事をした人も沢山いる筈である。

今この文を書きながら昔の事を思い出していると、此の頃物売りの来ないのに気がついた。ここ数年の不景気では行商に来ても商売にならないであろう。

昨年は移民九十年で募金に歩いたのであったが、大方の地方、農村も都会も相当に苦労なされて居られる様子であった。

してみれば、つまらない物を買わされて、たまには、しやくにさわる事があっても、そうした人の集まって来る様な良い景気になって貰う事が必要な事に気がついた。

第二十四話
運・不運

人の運とは誠に不思議なもので、運命判断などを商売にしている人も有るが、私も青年の時、姓名判断、手相学、人相学等に興味を持った事があった。

然し考えて見ると、故郷の札幌市の最高のように有名な易者が、前科十犯に近い犯罪人であったということであり、映画に出てくる易者なども殆んど貧乏人で、自分の運

命を拓いていないので、こんな事は役に立たないと思った。

その内に易書の中に、『積善の家に余慶あり、積不善の家に余殃あり』で、その人の精神作用と行いによって変化していくものであるから決断を下してはいけないと書いてあって、運命とはそうしたものであろうと考えて易の事は気にかけない事にした。

然し積善の家に余慶ありといわれても、実際に何事かに行き当ると、自分の損はしない様に、出来るだけ儲かるようにとか、オニブスに乗っても、良い席に坐れるようにと、すぐ思わされるので、心から積善の行いになる事は出来るのかと思う程難しいものと思った。

然るに世間には運の良い人も多勢いる、やはり善行の人であるのかも知れない。

又、反面、幸運を掴める立場に居て、掴めないで苦労している人もいるのは何故か気になるので此の一文を書く事にしたのである。

北パラナ国際植民地が、まだ誰にも土地を売っていない全くの始めに日本人で只一人視察に来ていた青年がいた。荒長十郎氏の長男、義雄君であった。

初代の国際植民地の聯合青年会々長を勤める事になる人である。

土地会杜も期待して好きなロッテ（地区）を選ぶようにと、視察用に乗る馬を用意してくれて何日となく最高の土

地を捜し歩いたのであるから、さぞ良いロッテを選定したかというと、さに非ず。四分の三というものろくにミーリョ（トウモロコシ）もフェジョン（豆の一種）も出来ない土地を選んでしまい、その後においても良いロッテと取替えもせずに失敗してしまわれたのであった。

私も当時遊びに行き、その土地の悪さに驚いたのであった。尚、荒氏の家族が私達の方へ遊びにきて作物の良く出来るのに驚いていたのであるから、当時ならいくらでも取替える事が出来たのであるが悪い土地に落ち着いてしまった。

荒氏に一、二年遅れて、頼則、吉村、板倉、小野、槙枝、田中、平田、今川氏らが土地を買い入植してくるのであるが地力は全く肥沃な地帯であった。又、その後に私達九家族が土地を購入するのであるが、土地は肥沃であった。

又、荒氏と共にファゼンダ・コアチーに契約して地主となって行かれた人々にも色々であった。松原、西谷、天野、緒方氏らのロッテは少し低くて、カフェー栽培では人並みではなかった。同じコアチーの契約者でも一区に行かれた武田、上路氏らの土地は良かった様であり、カフェザール植民地へ行かれた林兄弟の方は、デルバーダ（伐採地）のあとによくカブシンギの木が生える二等地であったと思われる。

良い土地が豊富に有る時代にもかかわらず、二等地、三等地を購入していく人がいるのは不思議なものである。

そこにも積善、積不善などと言う事が影響しているとも思われない事がある。

然し中には面白い事に二通りの人がいた。一人の人は、全く立派な土地に入って良くカフェーも実るので財政も楽になり、拡張しようと思ったが、視察してみても自分のロッテ以上のロッテに行き当らず、ここもダメこれもダメと終に拡張が出来なかったという人。

もう一人の人は、デフェイト（欠陥）のロッテが始まりだったので、何んとかしてもう少し良いロッテを買いたいと頑張り、余裕が出来ると拡張、拡張と張り切っていたら何時の間にか大地主になっていたという。どこへ見に行っても自分のロッテより良いと思えたので結果はよかったという事であった。

人生とは何が幸いするか分からないものである。

第二十五話
道具の手入れ

近所に住むＯ氏は、生まれながらの農家育ちで、良い体格で上手な仕事をされる人であった。

Ｏ氏の夫人は細身の方であったが、芯の強い、良く働かれる人であったから、四・五人の子供達も、まじめに育っ

ていた。特に感心したのは、農具の手入れであった。水に不自由していて、三百メートル位の所から天秤でかついでいるのに、夕方になると、キント（樽）を切って作ったタライに水を汲んで、鍬の土をきれいに洗って軒下にかけて置くのであった。見ても美しいので、私も見習って、大切な道具であるからそうするべきと、まねる事にしたが、すぐに洗うのは止めて、唯、軒下にかけておくことにした。なまけものだったのである。

その内に０氏は、美しい馬を買って乗っていたが、問もなくシャレッタ（人の乗る手軽な馬車）も買われた。それで、乗馬用とシャレッタ用の馬具が用意される事になるが、その手入れを、油を引いてきちんと壁に掛けて、いつも新品のような扱いである。

その内に、或る年独り生えの西瓜が良く出来て、馬と荷馬車、馬具付きの一揃い、古物ではあったが我が家でも買う事が出来て喜び、早速０氏に見習って、中古の馬具に油を引いてみがいた。

この油『オーリオ・デ・ペーシ（魚の油）』といって、魚から採ったものであろう、大変魚の匂いの強いちょっと臭いといいたい油であったが、皮の手入れには良い油で、これを付けて磨くと、一寸古物とは思われない程になってうれしかったのであるが、根がなまくらなので０氏の様に長くは続かなかった。

それにはなまくらとばかりもいえない原因として、Ｆ氏の指導？　も影響していたかと思うのである。

Ｆ氏とはロンドリーナに移転して三年目にマリアルバに二十アルケール購入して移転の準備をしている時、ロンドリーナ郊外のフレーザ植民地に土地を求めていた妻の兄姉が揃ってバストスよりの移転を思い止まって手放すという事になってきたので、私たちは、マリアルバの土地を流してそれを買って直ちに開拓にかかったのであるが、それは一九三九年の事であった。

この時の隣人がＦ氏である。

四人の子供は小さく、夫婦での開拓であるが、大変仕事の上手なまじめな人であった。カフェーの実る迄の収入として養豚で稼いでいたが、全くみごとに早く肥やすので驚かされたものである。

此の人営農は大変に上手なのであるが、道具の手入れはＯ氏とは全くの正反対であった。

私はＯ氏の影響で少しは手入れをしていた方か、或る時、Ｆ氏が遊びに来て、

「沼田さん、馬具など、そんな油を引いたりなどして手入れして少々長持ちさせるより、いたんだら又買えば良いのだ。その方が得だよ」

と、いうのであった。なるほど此のＦ氏、馬具も農具も粗末に扱ったが、生産は良くあげられたのである。営農ではとてもＯ氏の追いつけるものではなかった。

このＦ氏の感化を多分に受けて私は相当ずぼらになっていった。大体、元々がずぼらの人間であったから、尚更であった。

それでも欲が深いものだから、フェジョン（豆類）と、トーモロコシ（ミーリョ）の三毛作を思いついて、七、八年はその為に相当に助かった。この三毛作は、蒔付けと除草にかなり気をつけていないと成功しないので金儲けとなると、余りずぼらもしていられなかった様である。

この三毛作では、色々のフェジョンも種類に依って、植えてから収穫までに要する日数を調べると、七十五日程で収穫になるものから、百日を超し、百十日位までかかるもののある事が解った。

又、ミーリョには種類によって、早稲とおく手があり、又植える時期が遅れると出穂までの葉の数が多くなる事、即ち背たけが高くなって倒れ易く、その上、熱期が遅れる事もわかった。

慾からそんな事を真剣に考える時もあったが、色々な点でのずぼらな性質は持ち続けた。

然るに、その悪いくせが案外に引きつがれずに、子供や孫の方が物を大切にしてくれるので喜んでいる此の頃である。

やはり道具類は大切に扱う方が良いと思う。

第二十六話
人を馬鹿にするな

彼の土地は運が良く三五、六年も霜にいためられる事なく、立派なカフェーは良い生産をあげて楽な生活をしていた。

ところが、絶対ということはないもので七五年の大霜では、思いがけなくも根こそぎ枯れてしまい、芽の出ない株も相当にあった。

私たちも同様に披害を受けたのであるが、私たちは度々の事なので、早速苗を作って補植したり、実の成る迄の対策を立て仕事を進めていたのであるが、彼のところへ行ってみると唯呆然としていて畠には草が茂って、何んの対策も取られていないのであった。

経験が無いので、どうしてよいか、手が出ないというのであった。それで私たちのしている事を教えたのであるが、結局は土地を売ってボツボツと落ちぶれていくのであった。

又、彼の近所のT氏も同様、霜枯れのカフェザールには手が出ないとこれを投げ出して川辺にて野菜作に転じて、三十余年の裕福な生活から、かなり苦しい生活を送るようになっていったのである。

当時私は何故元気を出してもう一度カフェーを育てる努力が出来ないのかと大変はがゆくも思ったのであるが、そ

れから二十余年が過ぎて、幸いに私が八十近くになっても、案外に元気でいるので人間の生活というものは長い目で見ないで判断してはならない事に気がついたのであった。

人間生活には大体普通には子供がいて、二十才近くなると、考える事も、働く事も一人前になるので、親の生活が貧しければ、それから向上させる努力が始まる。子供次第で家の運命は一変するのである。

調子良く暮らしていても二十年もすると何うなるか分かるものではない。生命の事も分からないし、元気でいても二十才は老いていくもので、現状維持が何時迄も出来るものではない。従って決して現状を見て、人を馬鹿にしてはいけないと思うのである。

昔、サントスへ上陸した時、財布に四百レース（カフエー二杯代位）のお金しかなかったが、十年程で今日の様になったといって相当な店を構えて商売をしていた人のいたこともある。

又、リオ・デ・ジャネーロで失敗して夜逃げして来たので十五年振りかに昔の借金を払いに出かけたら、リオのバンコ・ド・ブラジルでは『十年を過ぎた借金は帳消しになっているから払わなくとも宜敷しいが、良く払いに来た』と、大変に喜んで下さって、今後の取り引きには私（リオの責任者）が応援してやるから安心して伯銀と取引する様にと元気をつけられてきたという人もいた。

又知り合いに、家長が若死にして未亡人が戸主になっ

て、老婆と小さな子供四・五人の家族がいた。働き手が良いわけではないが、なかなか上手に仕事をするので毎年相当の利益をあげるのであるが、仕事を拡張する家族条件ではないので、親戚の者がその金を借り出して使っていた。或る日私が遊びに伺っていると、「此の人も金を借りたいというが、此の人は何度貸しても返さないのだよ」と、いいながら、貸しているのであった。

それから二十年程して孫の男の子の時代が来たので、一般から比べて大変遅れた出発の様であったが、ぼつぼつと堅実な此の若主人の仕事が、十五年、二十年と過ぎると、何時の間にかと思われる様に仕事が延びて、大きくなっているのである。

人を馬鹿にしたり、見下げたりしてはいけない、人生の興亡変遷は案外に早いものである。

儲けて、これで大丈夫と思う時には、『これから下り坂になるのか』と、考えなおして気をつける事にした方が良いのかも知れないのである。

第二十七話　原木（トーラー）を売る

サントスから直接入植したセッテ・バーラス植民地では町から二十八キロも奥に入ったので、畠の木を売る等という事は夢にも思わなかった。

然し或る程度の木は有った。穴を掘って風呂を作ったのであるから、あの木など相当の太さはあった筈である。

又、私たちの居る問にサンミゲール・アルカンジョに通ずる道路工事が始まって、私の土地より二キロ位の処に人夫の小屋が相当に立っていたようであるが、その小屋はパルミットの掘立小屋でも、事務所や請負師や技師たちの家は製材で立てたらしく、その製材は道べりの十五メートルか二十メートル以内に有る木に権利が有るといって、私のロッテ（地区）の木も何本かを、外人の木挽が来て板にひいて持って行った。カネリンニャという大変にかたい、色の黒い板であった。

二、三枚分けて貰って勉強する机と、台所にテーブルを作った。かたくて釘が曲がるので、手でもむ昔の錐で穴をあけなければならなかった事を覚えている。無理に釘を打つと、曲がるか或は板がわれてしまうのであった。

翌年、ロンドリーナに来ると、町まで四キロ位であったので、僅かの必要の板はかんたんに手に入って便利であったが、畠に倒してある原木を売る事に気が付いたのは二年程後の事であった。誰が話を持って来たのか分からないが、セラリヤ（木工場）で、一立方メートルを八ミルレースで買うという事が分かった。八ミルレースとは一日の労働賃金くらいで、鶏の四羽、牛肉なら三、四キロ買える位の金額であった。

原木は畠に倒れていて腐れるのを待っているのであるが、ペローバは固くて容易に腐れる木ではないので、売れるものなら売ろう、と、同船の三家族は相談して、同じセ

ラリヤに買ってもらった。
しばらくすると人夫が来て太い物は短く細い物は長く切ったり、道をあけたりして、後にトラックが来て運び出すのであるが、柔らかい畠から重いトーラ（原木）を積んで出すのであるから相当にカフェーをいためると覚悟していたのであるが、割合にいためないものだ、と、喜んだのであった。
それでもカフエーを大事に育てている篤農家は、これだけいためるのならトーラは売らない方が徳だと言って売らない人も居たが、実際は経済が良かったからであろう。それでもあれだけの大木が長年邪魔になった事は相当の損害ではなかったかと思う。
私の家では最初に取り残した木を翌年再び買ってもらったので、骨を折ってまたぐ木が少なくなって仕事が仕易くなったと喜んだのであった。
そのトーラ運びで驚いたのは、隣りの加藤さんの木を運ぶ時になって、どうした事か、トラックが来ずに十数頭の牛に車を引かせて取りに来たのであった。十数頭の牛が重いトーラを積むのに大変に苦労するのであるが、植えてあるものをいためる事はトラックの何倍だ、これはひどいと見ていると、加藤さんも「次からはトラックで来る様にしてくれ」と、頼んでいたが、とうとう終り迄牛車に来られて、大変にカフェの若い木をいためられたのであった。
こんなところにも、運・不運というものがあるものだ。
それでも私たちの近所にはペローバの大木が相当に有っ

て、かなりの原木代が入って、仕事の仕やすくなったのと両方で大変に助かったのである。

四アルケールのロッテに何立方メートル有ったのか覚えはないが、沢山有った土地と、少し自まんに思っていたのであるが、此の頃ロンドリーナの移民博物館に直径一メートル八〇センチの立派なトーラ（原木）の写真が掲げられていて驚いた。私の土地では一メートルをやっと超えた木は二　二本しかなかった。

さぞかし此の大木の有った土地では、私の土地以上に量が有ったものと思われるし、又地味も肥えていた事であろう。

世の中、何事でも、上には上、と思いがけないものが有るもので、自慢は禁物である、と思わせられた。

第二十八話
洋服の仕立て

私はブラジルに来て初めて洋服を仕立ててもらった時は喜んだ筈なのに、その思い出を全く忘れている。

結婚式の時であったのか、或は二十才頃サンパウロの全伯弁論大会に出場した時であったかも知れないのであるが、結婚式の時が正しいであろう。

それ迄は町の商人の某家から、子供が大勢いて古着が沢

山有るのでと頂き物で充分に間に合っていたのである。
結婚は兄が二年程早いので洋服の仕立ても兄から始まったのであるが、その時の仕立屋さんは、現在ルア・セルジッペでバザールをされている木井さんのお父さんであった。背は低かったが体のがっちりした人であった。
セッテ・バーラス植民地から来て間の無い木井さん、別に向こうで知っていたわけでもないのに同じ所から来たという事で親しみを感じていたのであった。弟たちの結婚式の洋服も木井さんの仕立てであった。
いつまでも妻がいうのであるが、木井さんの洋服は肩当てを入れずに上手に盛上げて縫ってあると感心しているのであった。此の木井さんも割合若くして亡くなられ、その後しばらくして息子さんは仕立てをやめてバザール（小問物店）に更えたので、私たちも仕立屋さんに迷うことになった。
友人のK君が、パウリスタ線で開業していたR氏に仕立ててもらってみたらといわれて、セントロのプレージオ（ビル）の何階かで店を持っていたR氏に仕立ててもらった。此の時、時折しか作らない洋服にいやな事件がおきたのであった。
仮縫いして体に合わせ、いよいよ出来上る日がきて受取りに行くと、「着て見て下さい」というので、私は「此の間、仮着をしたので、着て見なくとも良いですよ」と、言ったが、「まあ、まあ、出来上りを見て下さい」と、いうので、それもそうかと、鏡の前で着て見たのであった。実際

は、洋服は二つボタンであろうと、四つボタンであろうと、衿がどうであろうと、私はどうでもいいので、妻の希望に合わせて作ってもらっているので、鏡の前で着て見ても、良く似合う、うれしいという気持ちより、問に合っているのに作らなければならなかったのかと妻の気持ちを計り兼ねて、案外安くない物をと財布の中身を気にしている様な事であった。

早速包んでもらって帰宅して妻に渡すと、妻は待ち兼ねていた様によろこんで包みを開いて、「アラッー」と、びっくりするのであった。今受取ってきてあけた洋服の前のポケットの上に一センチ少しの釘にでも引っかけた様な『かぎざき』の穴があいているのであった。

何かの拍子で穴をあけたので責任のがれをする為に「着て見なくとも良い」と、いうのに鏡の前で着せた。その時まさか、そんな事になっているとは思いもよらないでいる此方には一寸細工をすれば気のつかない事であった。これでR氏の処へは二度と行くことはなかった。

次は誰の紹介があったのか石垣さんに頼む事になった。此の石垣さんは温厚な立派な人であったが、六〇才前後で亡くなられたので、短い縁であった。次にはルア・セルジッペのバザール・マリリヤの隣りの小渕さんに仕立ててもらう事になった。若いのにどこで修業されたのか大変上手なので喜んでいたのであるが、車事故をおこし若くして亡くなられてしまった。その後は先に亡くなられた石垣さ

んの息子さんに仕立ててもらう事になった。上手なのか妻が気に入るのである。

洋服は私の場合は一生に何枚仕立てるのか、僅かの物であるから、仕立屋さんとの縁ほうすく、此こに書いた他には名前ではルア・セルジッペの始まりの方に大島さんという人が居られたが、縁が出来なかった。今のＣＩＰＡＳＡの車のアゼンシヤの所に相当以前に何んといわれたか角にミシンを数台置いて仕立屋さんがいたが、若くしてジャタイで溺死されたので奥さんは続けられず、閉店されてしまった。此の店で分けてもらった中古のミシンが既に五十年を過ぎるのに、未だに姉さんの愛用品で働いているので珍しい。

私はロンドリーナに三四年に来たので既に六十余年になるが縁の出来る人とは少ないものであるから、お互いに出来た縁は大切にしたいものと思っているのである。

第二十九話　籠編み

今年は大変雨が良く降って大豆の出来が良いのであるが、それにしても開拓当時に比べて雨量は少ないのではないかと思っている。

開拓当時は朝から晩まで降り続く日が度々あったもので、物置きの中でマッシャード（マサカリ）や、エンシャーダ（鍬）の柄を削ったりしながらも退屈する事が多かったので、その内に、籠を編む事を覚えたら良いと気が付いて、近所の市山太郎さんに習いに行った。

太郎君も畠の仕事が忙しいので籠編みは雨降りの仕事であった。大変にしっかりしたセスタ　（手かご）　を編んでいて、良く教えてくれたが、とても急には同じ様なものは出来そうではなかったが、その内にまあまあの物が出来るようになった。

或る時思い立って二組の天野さんに目かごを習いに行って驚いた。天野さんは日本で籠編みの職人であったそうで、その為の仕事場も作ってあって、目かごの編み方を手ほどきして下さったので、下手でも編めるようになったのである。

天野さんで驚いた事というのは、四ツ割した竹を更に半分か三分の一かに割ってから中身をはぎ取るのであるが、私たちはその一本を持って気を付けてはがないと、そげて、皮の部分の大事な所が薄くなったり、厚くなったりして困るのであるが、天野さんは、竹を二本も、三本も持って、一度に中身をはいでいくのである。全く手品師のような仕事ぶりである。職人とはこうしたものかと驚いたわけである。

そうして雨降りや、仕事のひまの時にけいこしている内に少しずつは上手になって、ミーリョ　（トウモロコシ）を集める籠なども間に合うようになり少しは売る物も出来る様になったので、どの土地にも竹を良く植えた。

今のファゼンダ等、半アルケール以上も竹を植えてある。

既に忘れかけていたが今のファゼンダのカフエーの倉庫も雨降りには籠編みの出来る様にと、部屋と部屋の間の仕切りに細工して五メートルの竹で自由に仕事の出来る様に計画して造ったのであったが、ファゼンダを経営する様になってはとても籠編みなどしている暇は出来なかった。それで植えた竹が沢山有るので籠編みする家族者が来て歩合いで働いてくれた事も有った。

然しそうした一般にも少ない籠編み職人の仕事は、どうしてもミーリョ（トウモロコシ）を畠からかつぎ出す籠が主になるので、ミーリョ作りが機械化された今日では、その為の籠の必要が少なくなったので、従って籠編み職人の仕事は商売にならなくなってしまった。

私の半アルケールを超える竹林は、時々市役所や産業組合がカフェーやラランジャ（ミカン）の苗作りの日おいに欲しいとてたまたま取りにくる位のものであるから、そのうちに引っ繰り返してパストにでもする事になろう。ところが竹たやしの仕事は昔は頭が痛くなる程大変であったものが、今の機械では、竹の株など、全く簡単に抜いて一方に押しまくってくれるので気にかける事はいらないのである。

唯、今は無駄になった、この竹薮を片付ける事を考えているのであるが、五十年前、此のファゼンダ（耕地）百十三アルケールを購入して移って来た時、三十二才の私は、雨降りの仕事の為にと広く竹を植えて、結局殆んど利

用する事はなかったが、そうした事を考えていた若い頃を懐かしく思い出す。

その竹細工をする為にと作った相当大きなカフェー倉庫も私共三人兄弟で造り上げたものであった。

今頃こうした古い昔の仕事の跡を見ながら、若し五十才位で死んでいたら、何んの為に生まれてきたのかと疑いたい程人生などはかないものと思う。

今八十才に達して尚案外元気で暮らされているので、つまらない事をしていた時の事でも、懐かしく思い出し、楽しむ事が出来るのである。

やはり長寿は幸せである。

第三十話　『流転』

戦争で日本との交流が止まったので日本からの雑誌が手に入らず、日本語の新聞も止まり淋しい時代が何年も続いた。勿論シネマも止まっていた。

ときたま日本政府の委託を受けていたスエーデンの公使館からちょっとした連絡が有ったのも、終戦後勝組が騒ぎ出してから、正しいニュースを流したものの様であった。

日本の肉親との通信も戦後万国赤十字を通じて届けられ

た様であったが、それも終戦後どの位した頃の事であったのか忘れてしまった。

とに角相当長い間国交がとだえていた為に移民は淋しい思いをさせられていたのであったが、その内に肉親との通信が始まり、パウリスタ新聞の発刊となったので、早速講読を申し込んだのであった。これでやっと日本語の活字が読める様になってうれしかった。

その頃、一日同船者の大西家をシャーカラに訪ねると、此れから巡回映画を持って廻る事になったので、今夜は試写会をするという事で一寸驚いたのであった。早く亡くなった次男の信之君等もその時はうれしそうに浮き浮きされていた。

大西氏を共営者に誘ったこの仕事の主体となる人は、薮政美氏であった。氏は最近少し健康を害して居られたが、大分回復されてきているが、大西氏は二年程前に他界された。

さてその時の試写会は、何んと坂東好太郎主演の『流転』で見ごたえのある良い映画であった。見た後にお茶をよばれながら感想を聞かれたが、私は『此の映画は絶対に受ける』と実感を述べておいた。戦後のパラナの映画は、薮さんの『流転』から始まったのである。

薮さんと大西氏の共営は長く続かず、薮氏は共営者に苦労されたのではないかと思う。

夜の仕事であり、一旦巡回に出ると、簡単に帰宅の出来

ない仕事であるから、端で見る様に容易な仕事ではない筈である。然し薮氏や、イピポランの岡本氏等はこの仕事を相当長い間続けられたのであった。

此の人等が日本映画を持って来てくれたので一九四七・八年から八〇年代初期まで、大きな娯楽の一つとして楽しませて頂いたものである。ロンドリーナでは殆んど毎週の様に上映された時期もあった。いや週二回上映された事もあった。

それがテレビにおされ、ビデオの発明では完全ストップしてしまったのである。

その為にゲート・ボールでいつも最高齢者として表彰される薮さんが、戦後初めて日本映画、それも『流転』の様な名画を持ってパラナの隅々迄巡回して楽しませてくれた映画界の創始者である事を忘れてしまった人が多いのではないかと思う。

私達の植民地では主に青年会が主催で引受けていたが、赤字が出ると面白くないので、どうしても値切る。興行する方では良い映画は借り賃が高いのか、或いは良い映画で儲けておかないと、普通の映画で儲からなかった穴埋めなどをしなければならないのか、此の映画は普段の値段では出来ないという事がある。

良い映画だから入場料の値上げをするか、良く宣伝して人を誘ってくれれば損はしないと言われても、農村では見に来る人数はやや決まっているのに雨でも降られると人の出がにぶるので心配させられたが、こんな思い出を書こう

とすると当時の事が思い出されて懐かしい。

薮氏の場合は戦後であったから、戦前のように、別に車をやとってきて、車輪にベルトをかけて発電機を廻して電気を起こすという事はなかったと思うが、それにしても夜おそくなる仕事で、それが続いて行くので大変であった筈である。

お客は良かった、面白かった、見ごたえがあったと喜んでくれても、上映する側には毎晩同じ物を写しているので、その度に感激していられるものではないので大変であった筈である。

アサイだけでも二十ケ所位はあったらしくウライでも数ケ所のセッソンを廻ったらしい。パラナ全域では相当な数を巡業したわけであるが、良くも三十余年も続けられたものである。

仕事とはいえ、あの様に娯楽の少なかった時代に農村の隅々迄シネマを持って三十数年も廻って人々を慰安してくれた事は、杜会的に見て功労者と言うべき人の内ではないだろうかなどと、私は思っているのである。

その薮政美氏九十余才でこの頃暫く健康を害して居られたが、もう少し回復すれば再びゲート・ボールにあの顔を見せてくれる事になろう、又そうなって欲しい人である。

後書き

昨年七月第五部を発表して後、忙しかった事もありますが、我が家の生命線のアルコールの販売が止って収入ストップが第一難関、何んとかして少し植えた大豆の豊作で、やっと一息入れて、ここに第六部の印刷となりました。

移民シリーズとなれば、サウーバとの戦いであった時代を『蟻と移民』とし、同じ時代ではあるが、アルゴドン景気にあおられて、主にパウリスタ・ソロカバナ沿線の大半を僅か二、三年の借地で、後は牧草を植えて転々として歩いた時代、いうなれば『バクチ農業と移民』。更に悲惨でもあった、『戦争と移民』等々書く事が沢山ありますが、思いついたのが私の晩年の事でどこで終るか解りませんが、十部までは出したいものと思って居りますので、刊行されました時には、目を通して頂きます様お願い申し上げます。

既刊　第一部　カフェーと移民　発行1996年４月
第二部　ビンガと移民　発行1996年９月
第三部　毒蛇と移民　発行1997年３月
第四部　ムダンサと移民　発行1997年10月
第五部　赤土と移民　発行1998年７月

第六部　ビッショ（砂ノミ）と移民

発　行　1999年６月　初版発行
著　者　沼　田　信　一
SHINICHI NUMATA
Rua Raposo Tavares, 828 - Londrina
Est. Paraná-Brasil-Caixa Postal 860
CEP 86010-580 - Tel:(043)322-1740
印　刷　Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - S. Paulo
Tel:(011)279-5522 Fax:(011)279-3975

著者　沼田信一　略歴

出　生　大正七年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る
学　歴　札幌市第一高等小学校卒
渡　伯　昭和八年（1933）７月サントス上陸、アリゾナ丸
直接海外興業株式会社開発のセッテ・バーラス植民地マンパウロ区へ入植、翌年５月パラナ州ロンドリーナ市郊外中央区へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジャ郡内へ移転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。
職　業　渡伯後一貫して農業